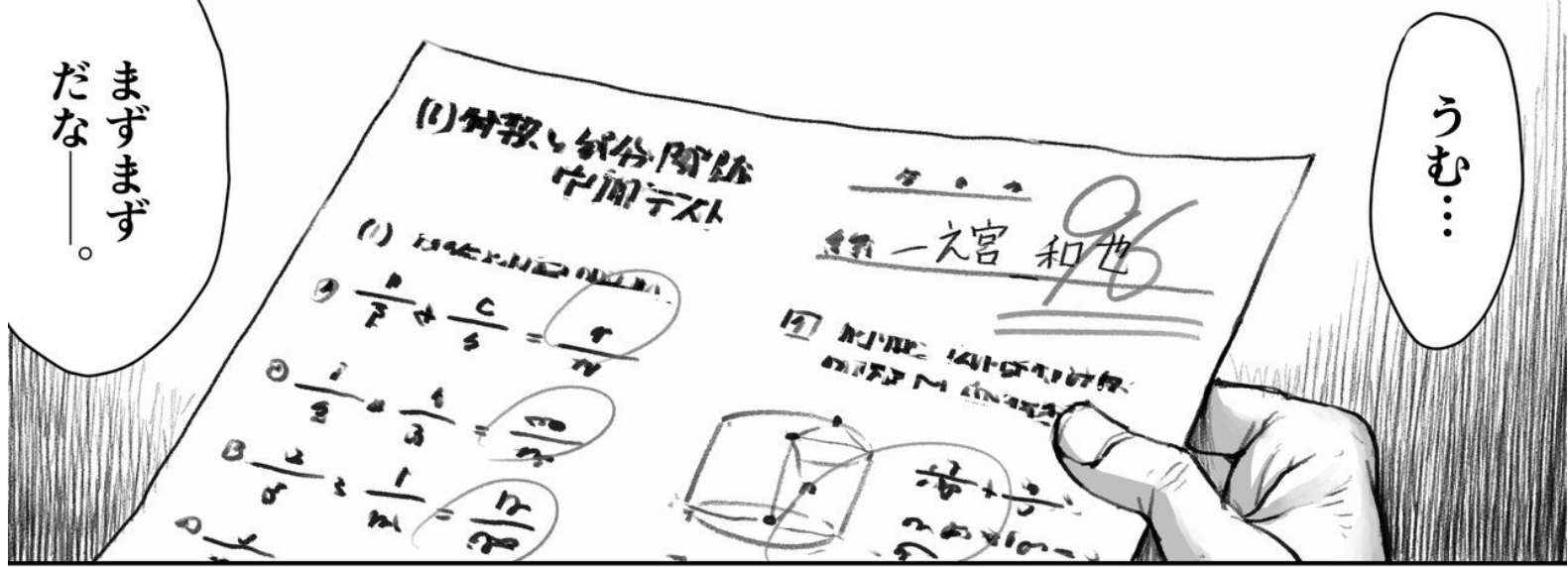


妖

詣



—あやかしもうで—



うむ…

まずまず
だな。

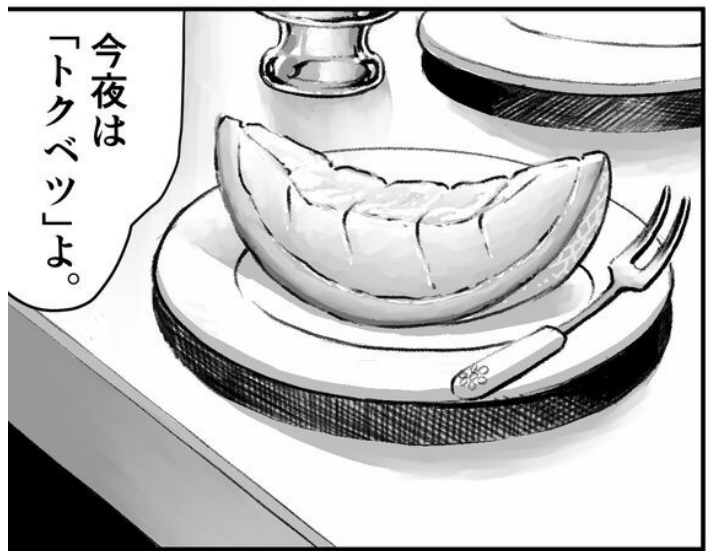


よく
頑張ったわね…

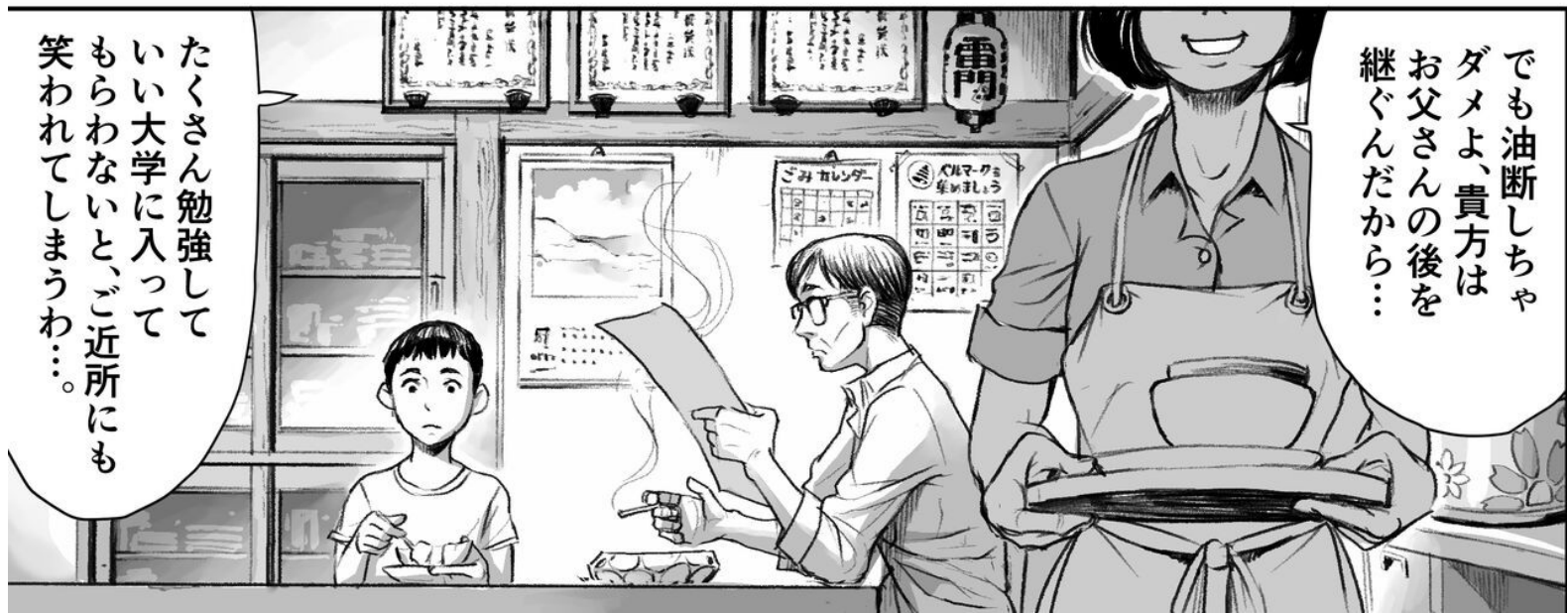


…この調子で
がんばりなさい。

…は。



今夜は
「トクベツ」よ。



でも油断しちゃ
ダメよ、貴方は
お父さんの後を
継ぐんだから…

たくさん勉強して
いい大学に入って
もらわないと、ご近所にも
笑われてしまうわ…



水と塩を取り替えてきてくれ…。

「あそこ」へ行って、



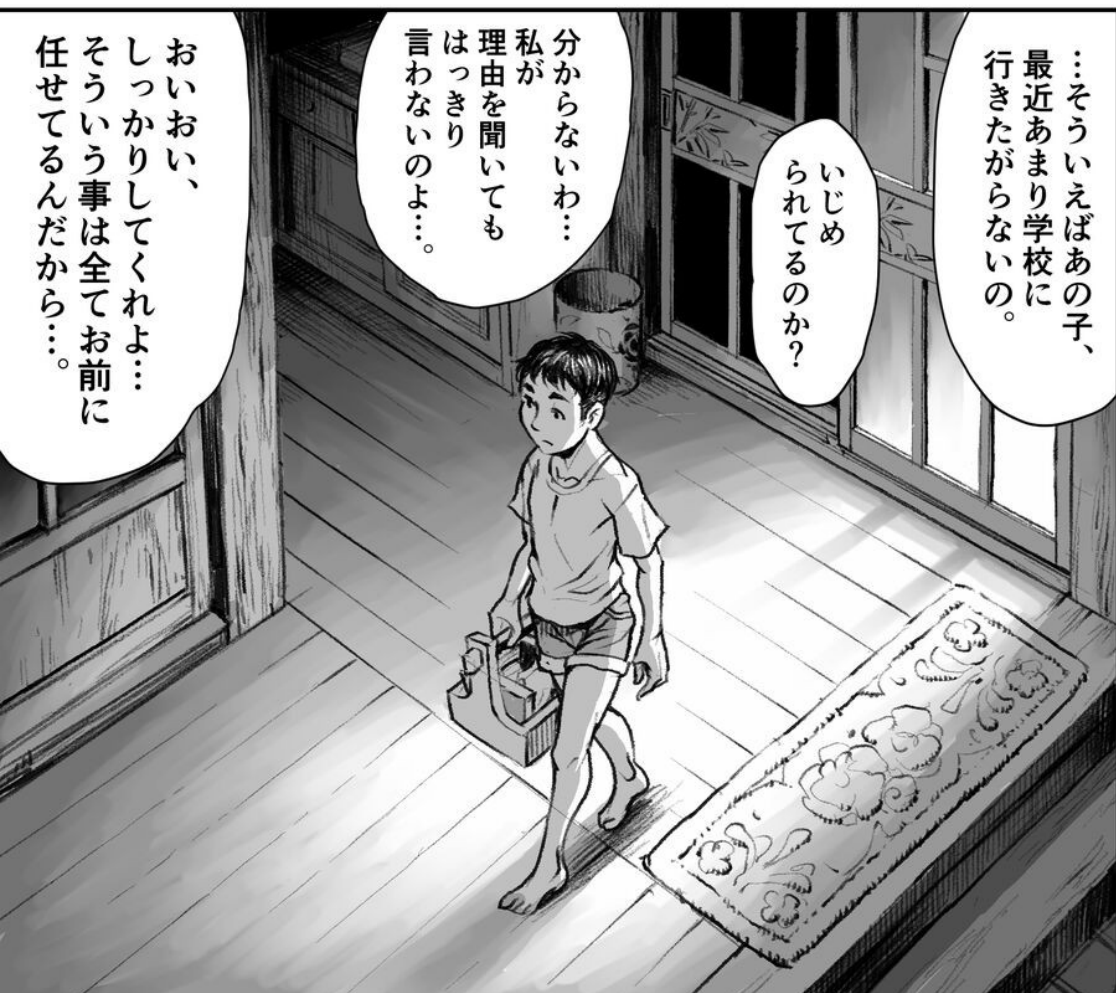
ごちそうさま
でした…。

早くお風呂に
入って明日の予習を
しておくのよ。



カズヤ

部屋に戻る
前に…



おいおい、
しっかりしてくれよ…
そういう事は全てお前に
任せてるんだから…。

分からないわ…
私が
理由を聞いても
はっきり
言わないのよ…。

いじめ
られてるのか？

…そういえばあの子、
最近あまり学校に
行きたがらないの。

…はい。

僕の家は古くからある神社だ。



境内には僕と両親が住む家がある。



祖父母は僕が生まれる前にふたりとも亡くなっていたので…



…そして



この家には家族が「あそこ」と呼ぶ場所がある。



この古くて広い家に僕と両親が3人で暮らしている。

名前を呼んではいけない場所だ。

原作/脚本/作画
だぶるでっく



協力:
All supporters of
PIXIV FANBOX



制作:
ダブルデック
製作所

妖

—あやかしもうで—

詣



…昔、この村でたくさんの子供が
神隠しにあって消えてしまい、



それを引き起こした
もののけが、この柱に
封じ込められている…
と、僕は教えられてきた。



僕のご先祖がその
もののけをこの柱に
封印してから…



僕の家は代々
この柱を守り、

地域の人達からも
敬われている。

こんな暗くて
不気味な場所…
同級生なら
近づかない
かもしれないけど、
かもしれないけど、



僕は小さい頃から
連れて来られていたので
慣れっこだった。

…それどころか



最近は家や学校にいても
居心地の悪さを
感じるようになった僕は、
この暗くて周りから
閉じられた場所に来ると…

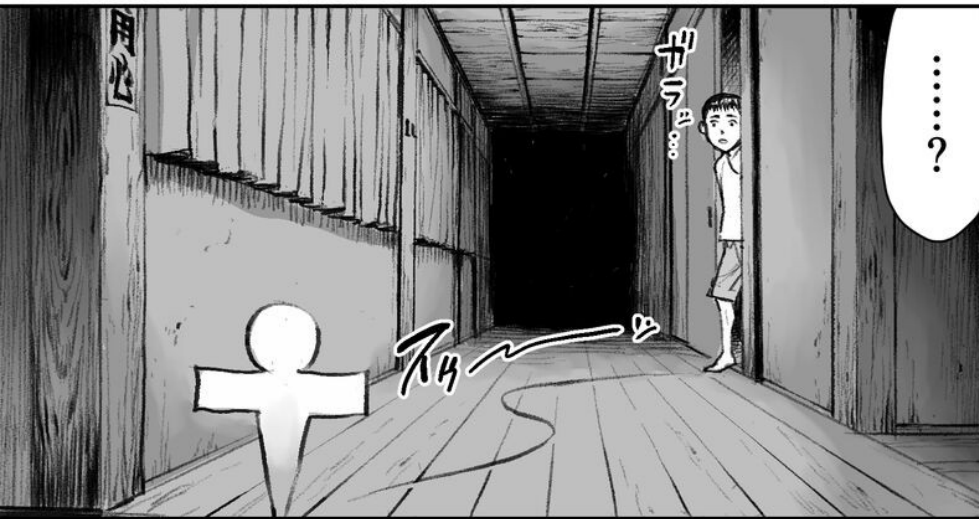
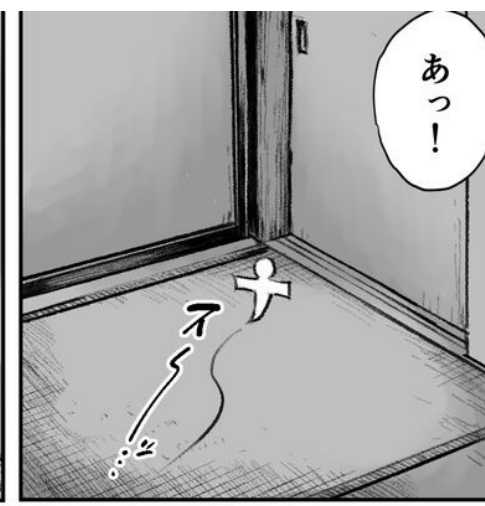
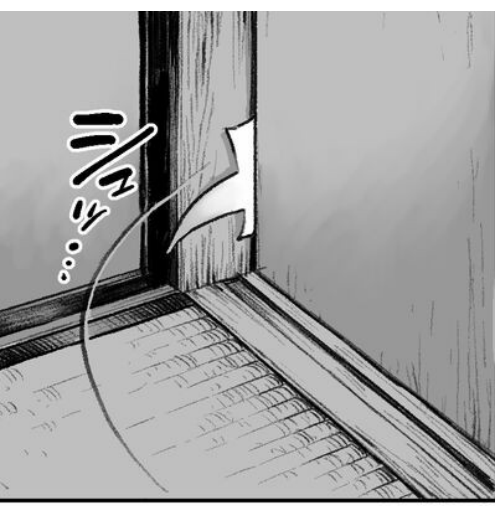
妙に心が安らいだ。



まただ…



ここへ来るとどうして
いつもこうなるんだろ…？



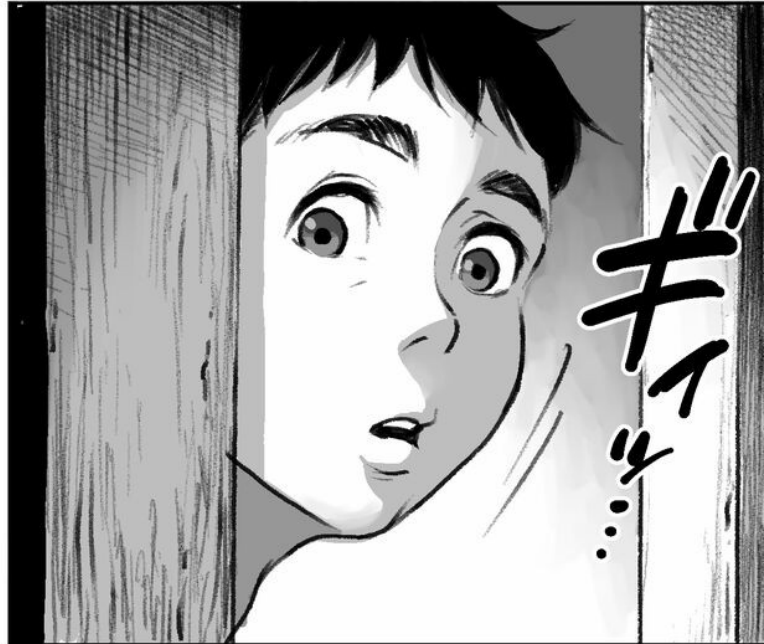


明かりが…

ついでる…？



ギョッ…



ギョッ…



火の用心



ギョッ…

ギョッ…



ひ…人ッ!?

え…!?



この女の人が…

もののけ…?



あれは…

あ…

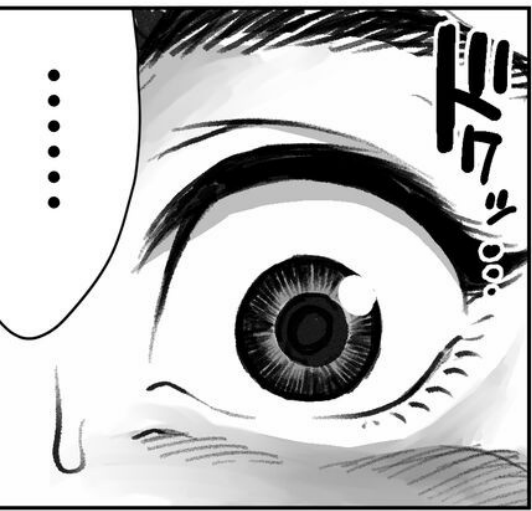
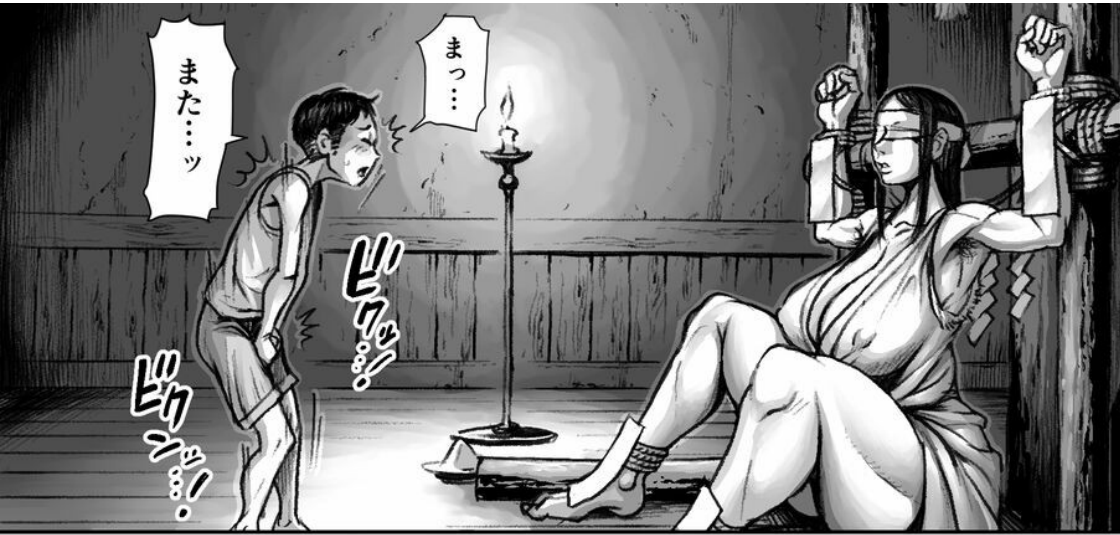


まさか…

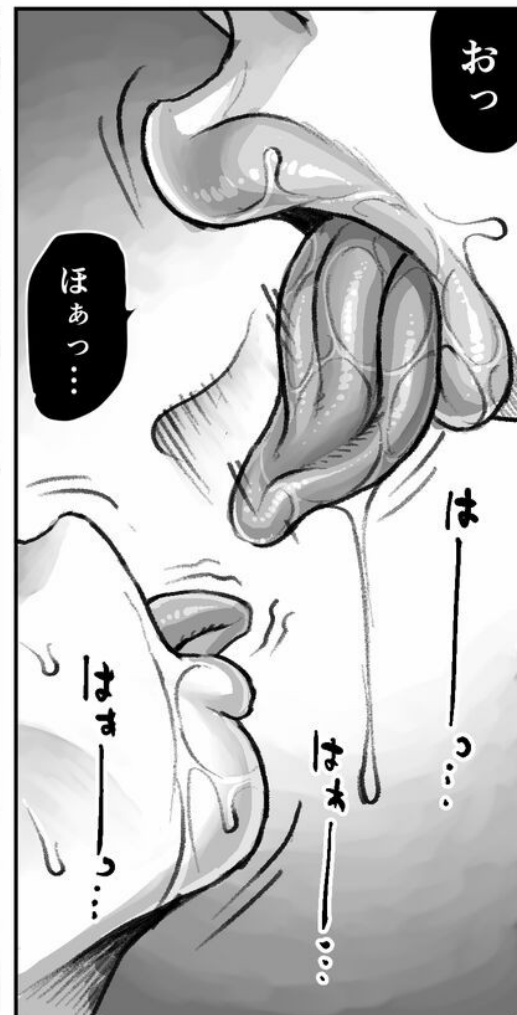


どうしてここに
女の人が…

!?

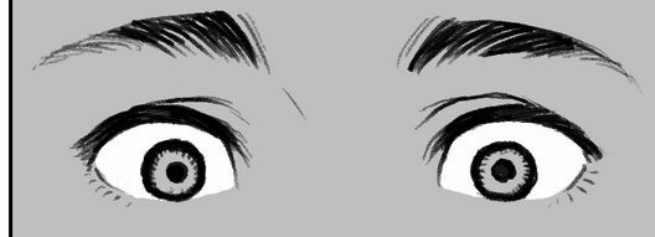
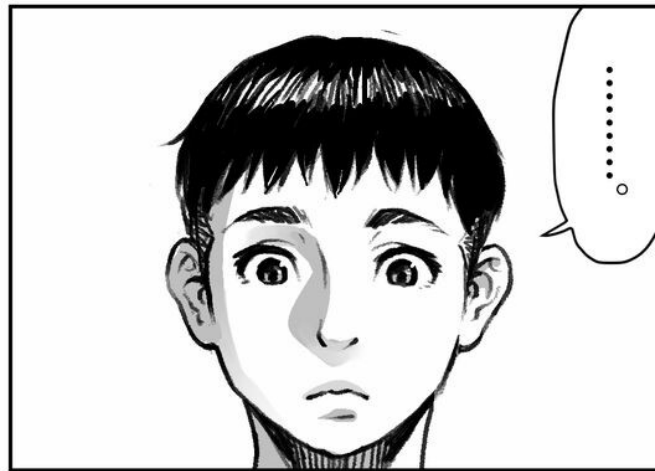


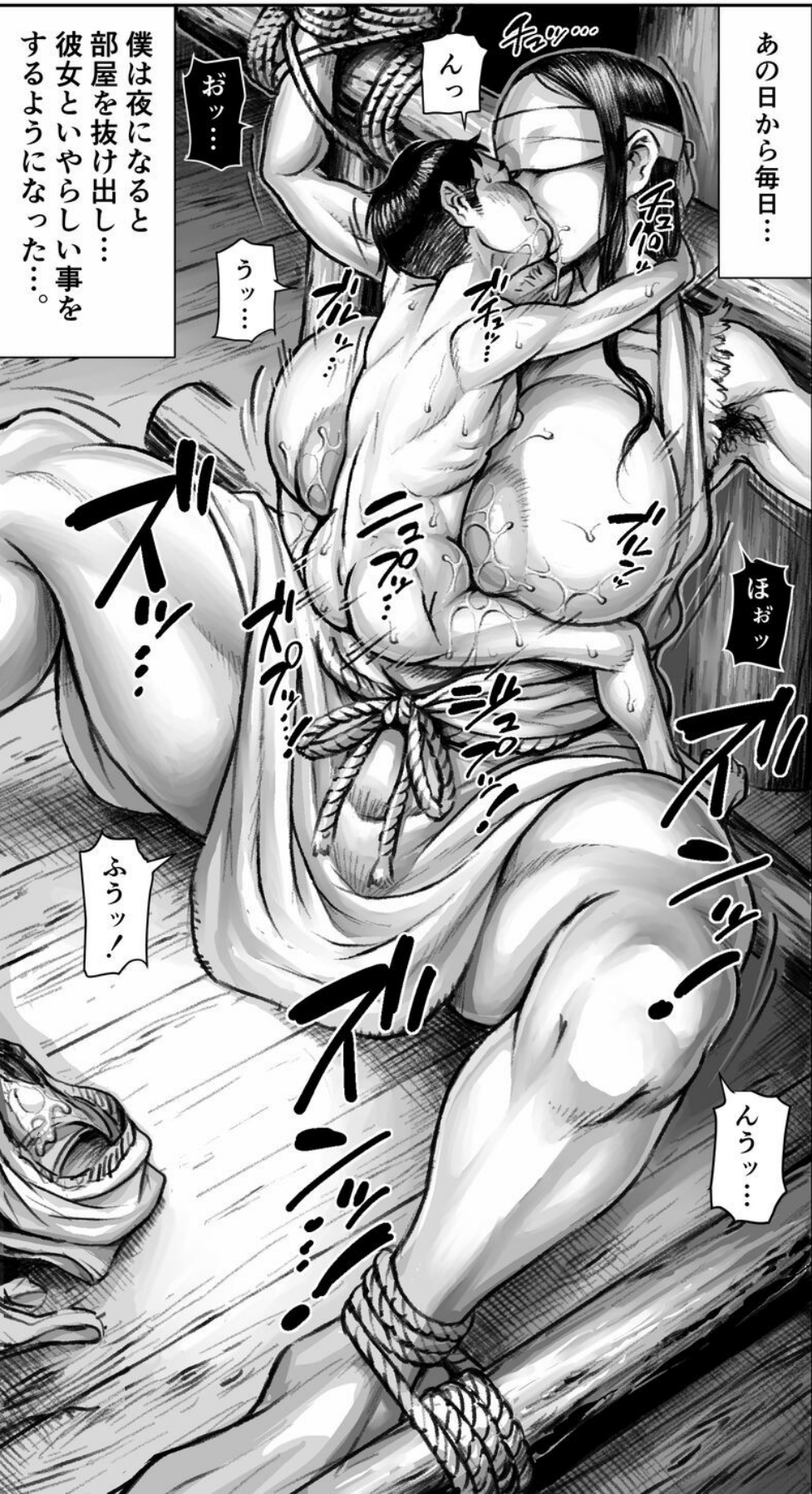












僕は夜になると
部屋を抜け出し…
彼女といやらしい事を
するようになった…。

おッ…

うッ…

んっ

あの日から毎日…

ほおッ

んうッ…

ふうッ!



んッ…

いんちッ…

はあ…

はあッ



ハッ…

ハッ…

ハッ…

ブルッ

ハッ…



ブルッ

ブルッ

ブルッ

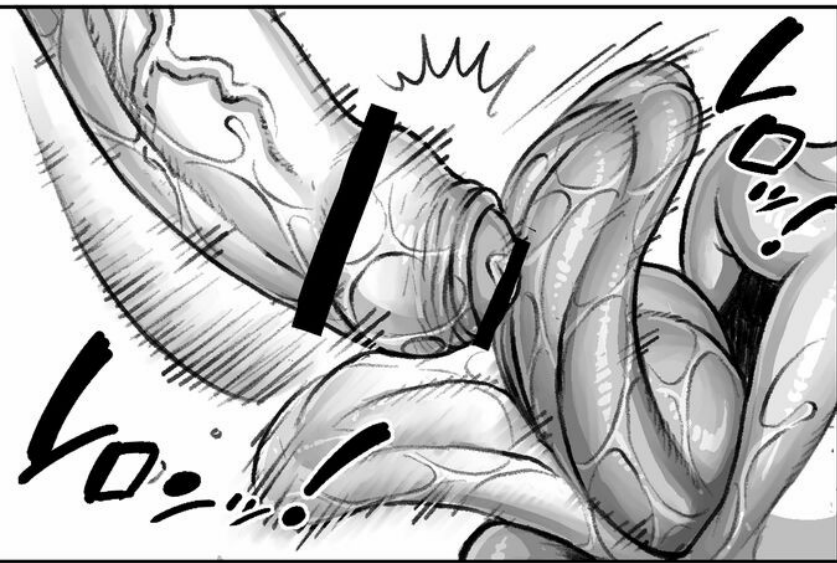
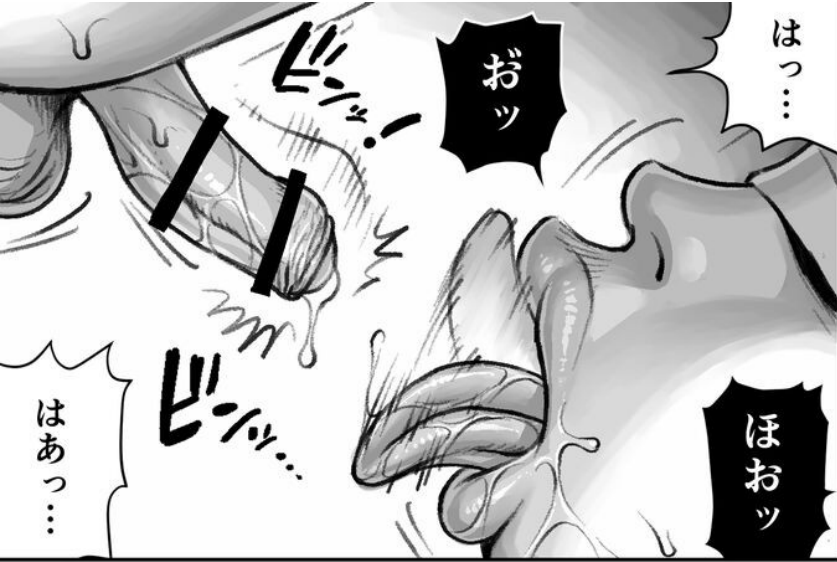
ブルッ

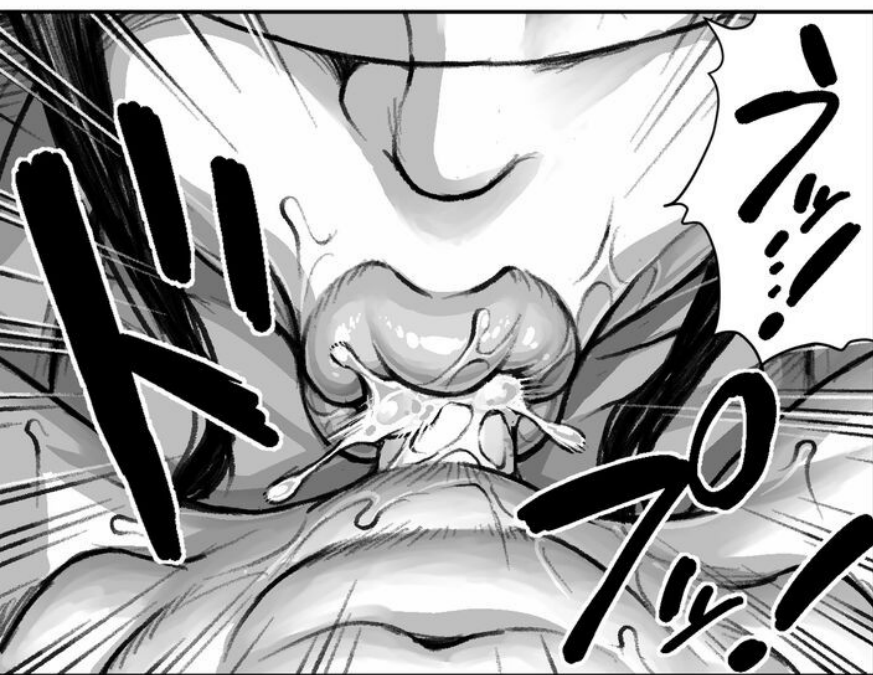
ブルッ

ブルッ

ううッ…!

はあッ…









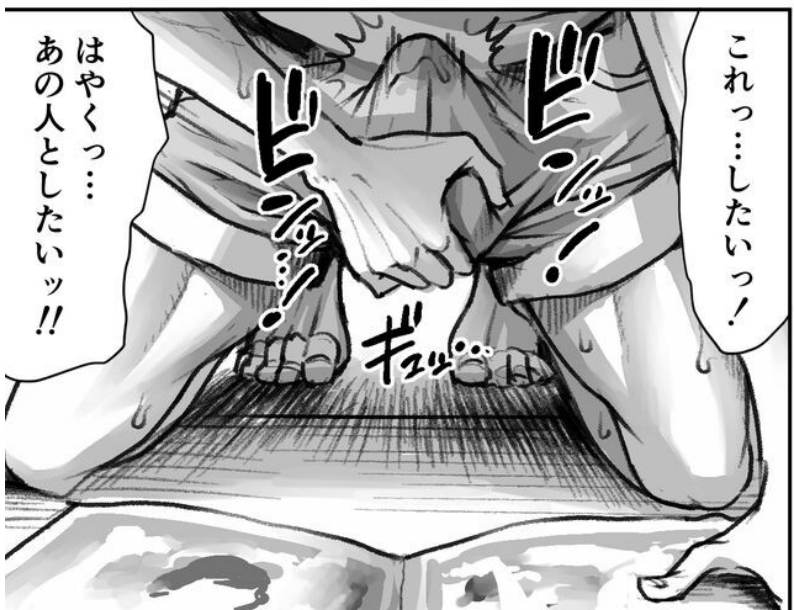
セックス
という言葉は、

クラスの男子達が
ふざけて言うのを
聞いて知っていた。



男の人と女の人が
するイヤらしい
事で...

僕は昨日まで
あの人としていた事が
セックスなんだと
思っていた...



これっ...したいっ!

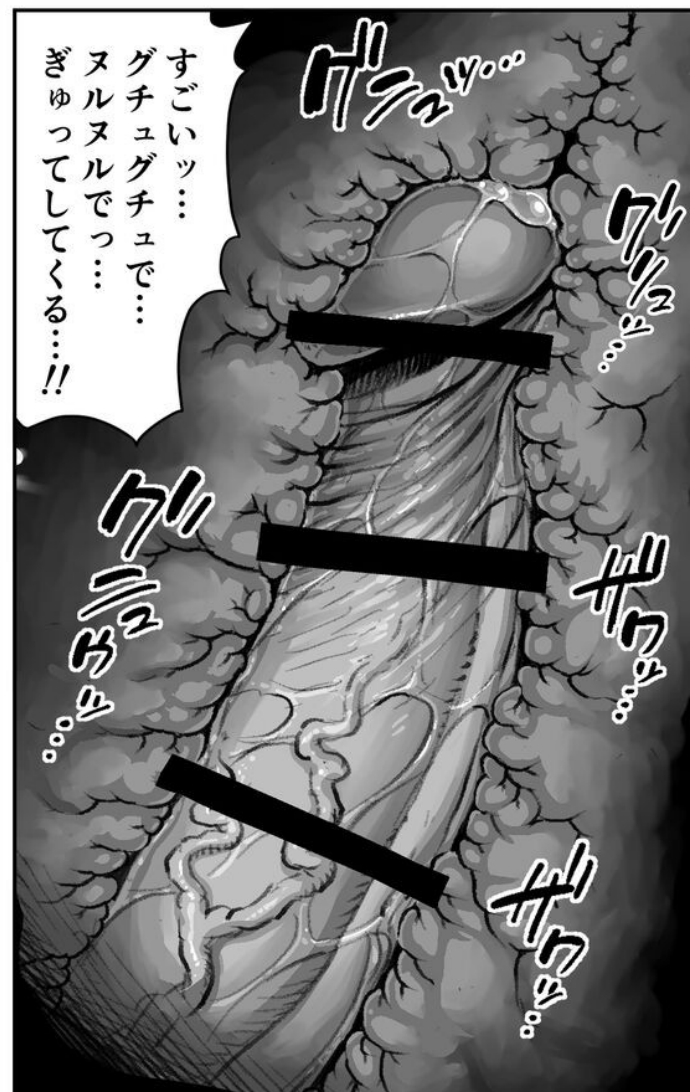
はやくっ...
あの人としたいッ!!



でもそれは違った。

す...
す...
ズッ...







んっ...

んっ...

んっ...

んっ...



んっ...

んっ...

んっ...



はあっ...

はあっ...!!



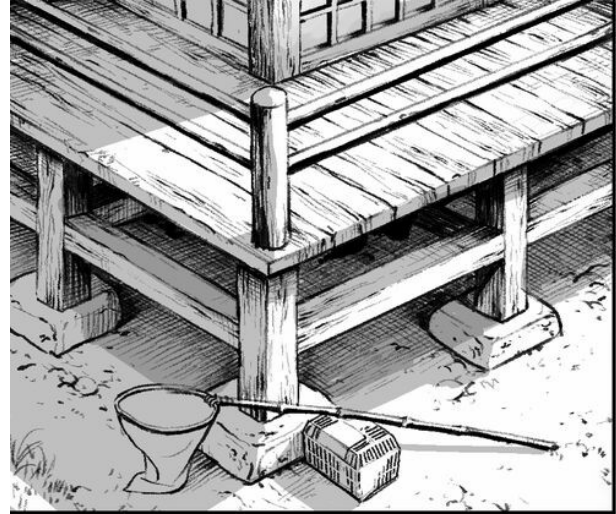
んっ...

んっ...

んっ...

んっ...







お——い!
カズヤ——ッ!!

カズちゃん
返事してーッ!



んうッ...

ふうッ...

うッ...

オッ
オッ

ビュッ...

ふうッ...

ビュッ!
ビュッ!



朝から姿が
見えないんだっ!

...えっ?!

あつ君たち!
ウチのカズヤ
見なかったかい?



やべッ

人が来たぞ
早くしまえッ!



あれ...?

カズヤの父ちゃんと
母ちゃん...?





くそっ！何で鍵も付けないのに開かないんだ！

カズヤ！そこにいるなら開けなさい！！



あなた…やっぱり警察に…

馬鹿！この低度の事で警察なんか呼んでみる…村のいい笑い者だ！



あの人たちが愛していたのは…

成績が良くて、まじめで、親の言う事を聞く、良い子の僕「だけ」だ。



こうなったら
扉を破るしか
ない…

お前は
離れていなさい！

だから、

お父さん。

僕と同じくらい
成績が良くて、
僕と同じくらい
まじめで…

ごめんなさい…。

朝早くからカブトムシを
取りに行つて気がついたら
こんな時間になっちゃった。

僕と同じくらい
親の言う事を聞く
「良い子」であれば…

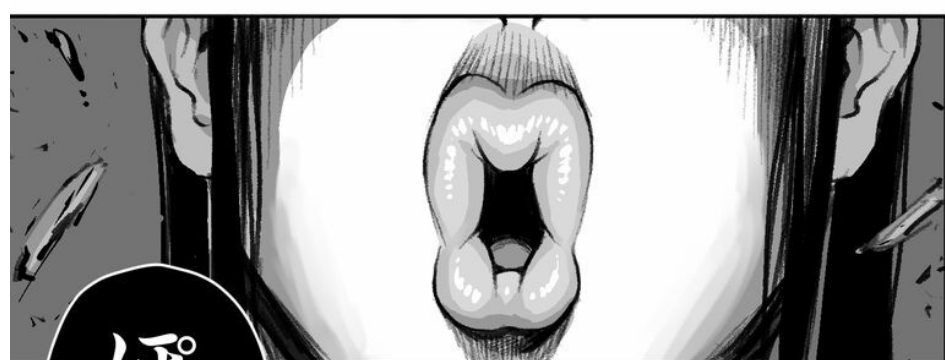
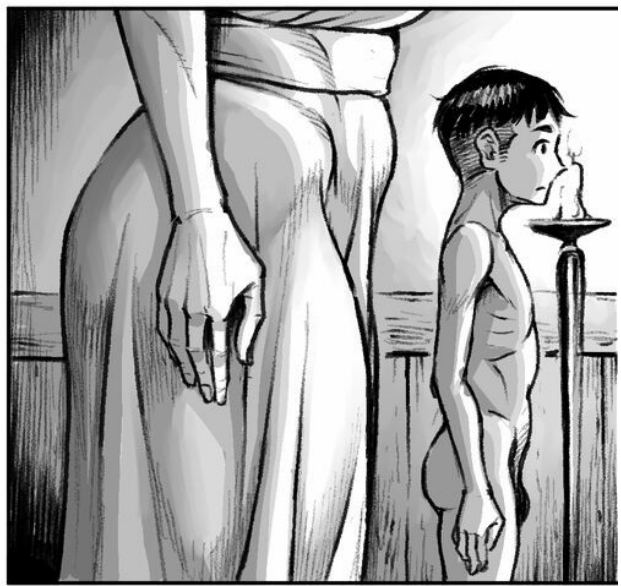
その「良い子」は、

「僕」である
必要はない。



カズちゃん…
お母さん
本当に心配
したのよ!

まったく…一時は
どうなるかと…

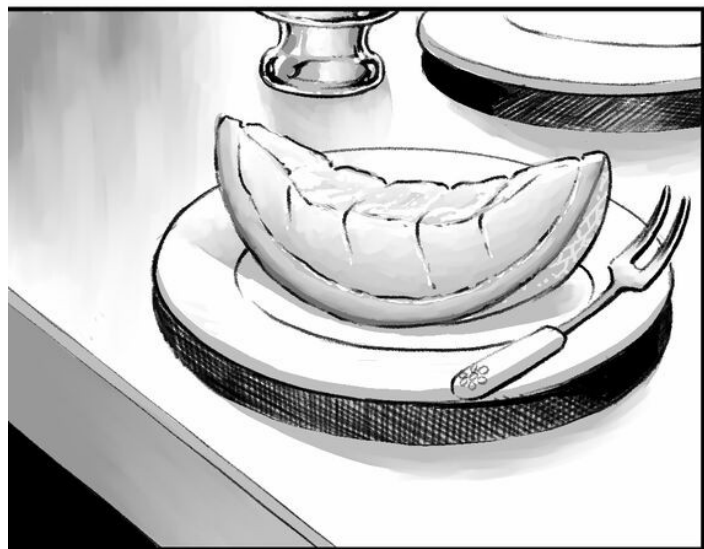
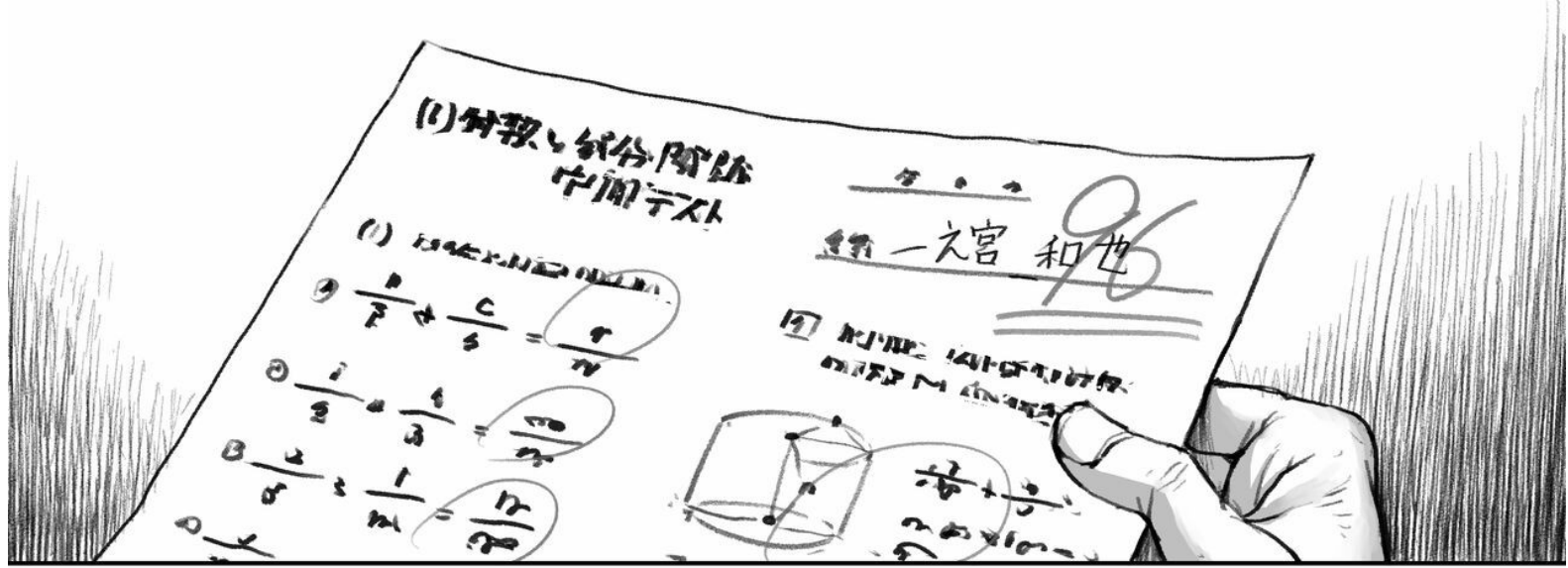


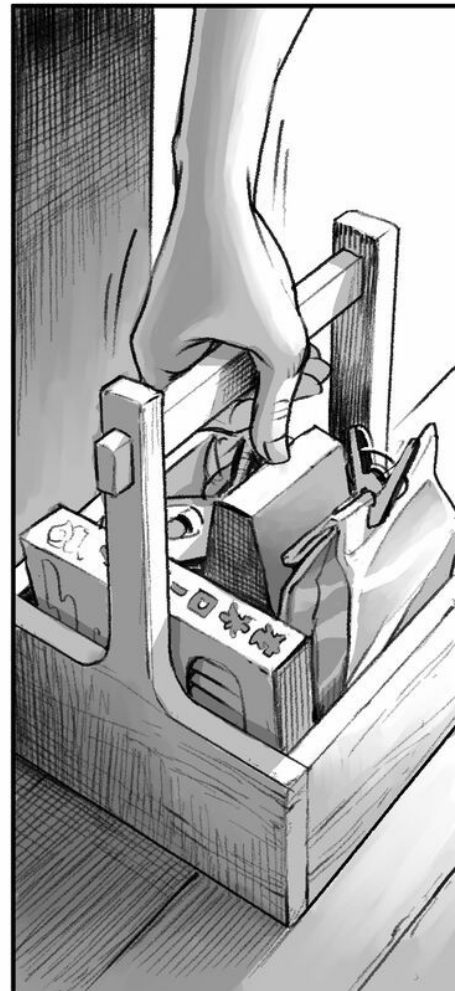
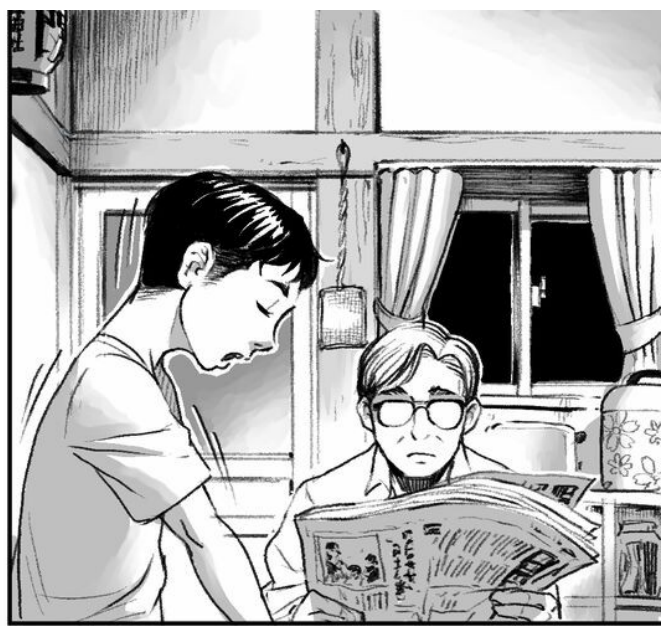
ぽっ。

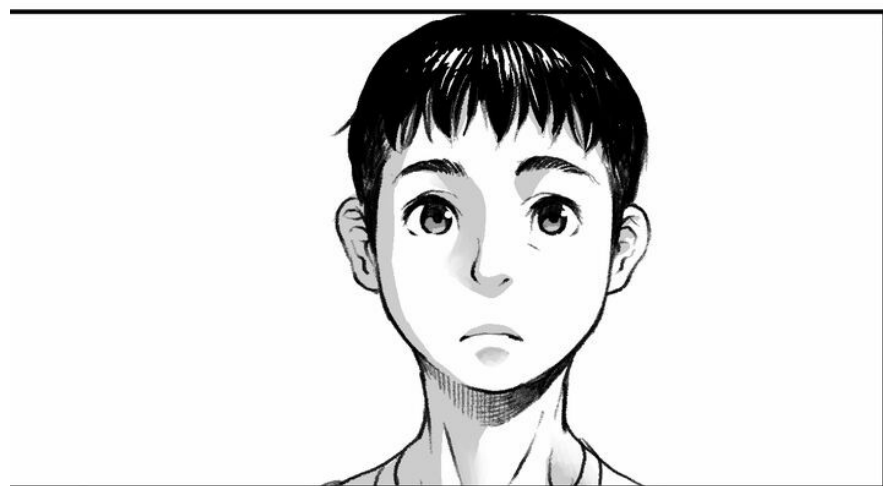


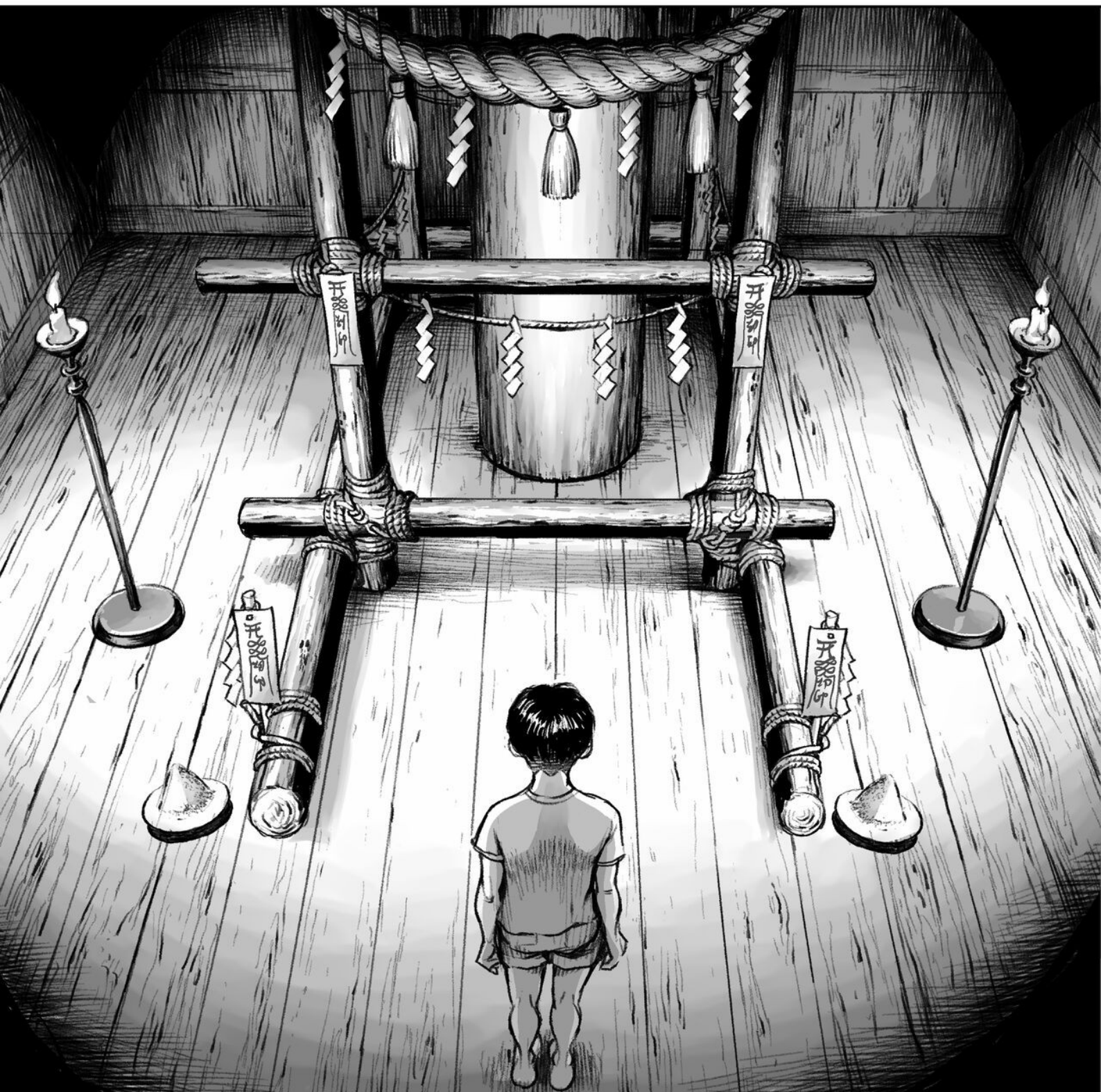
終

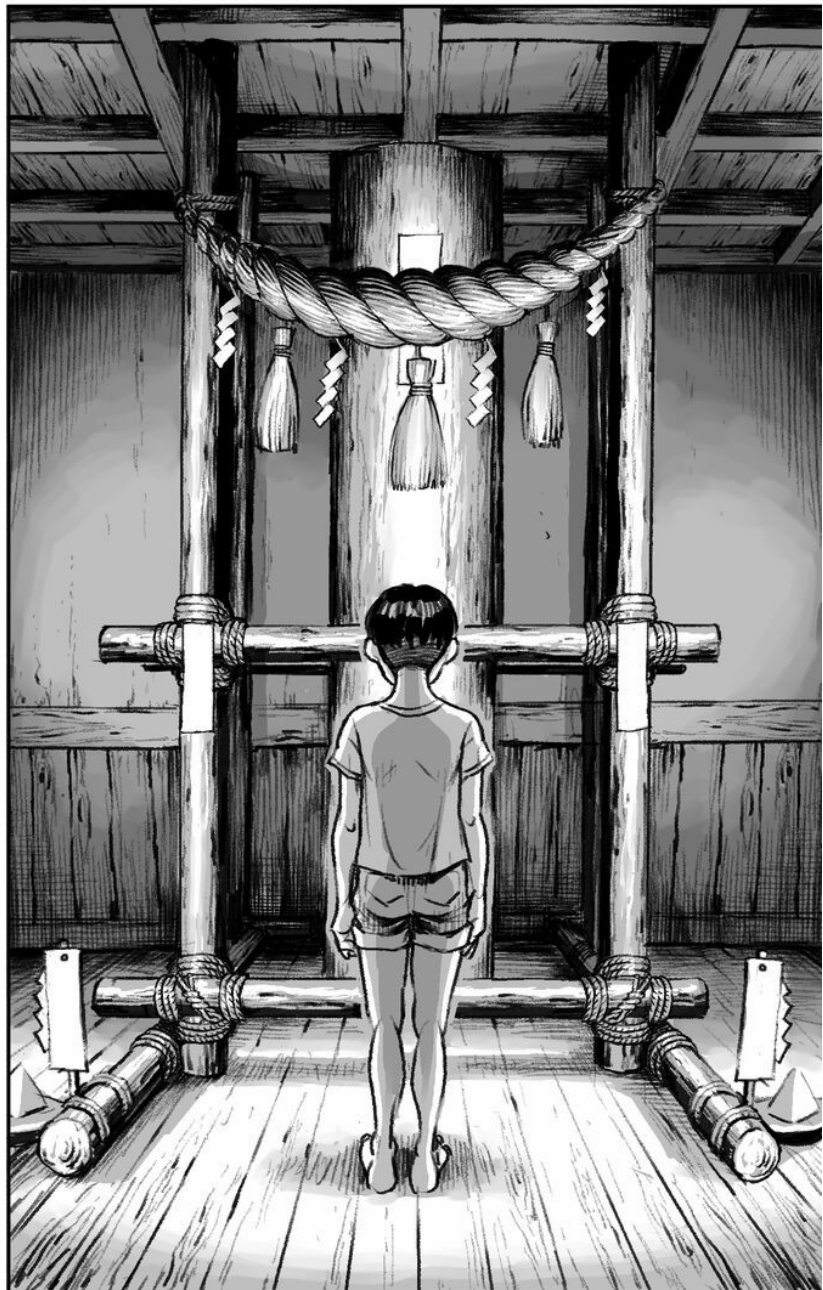
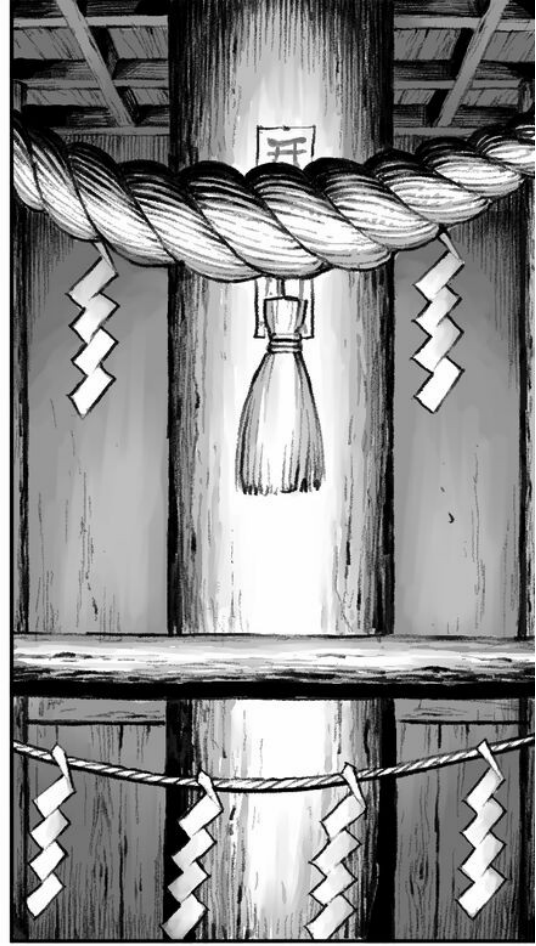
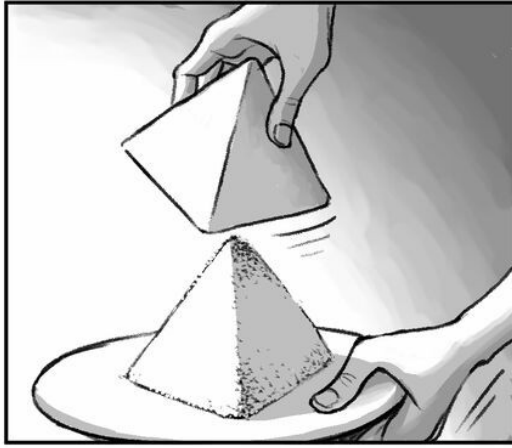
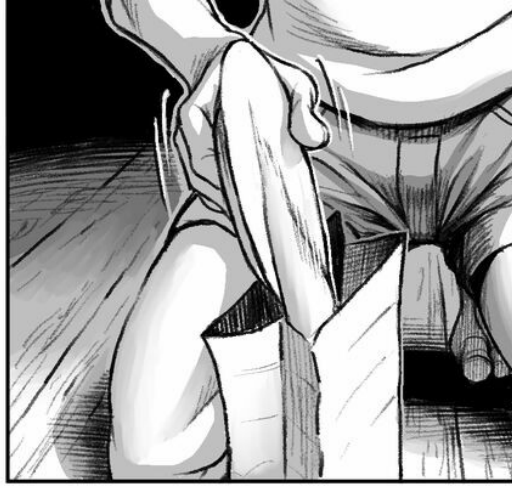
- E N D -



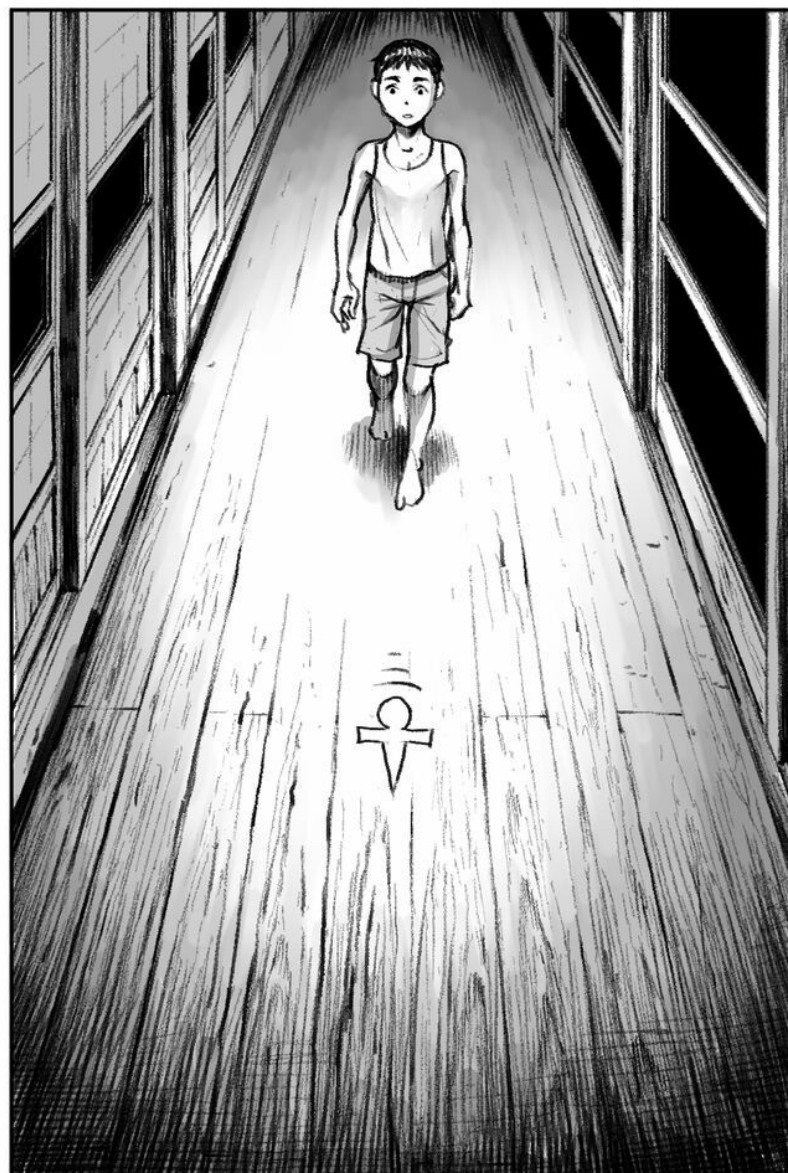
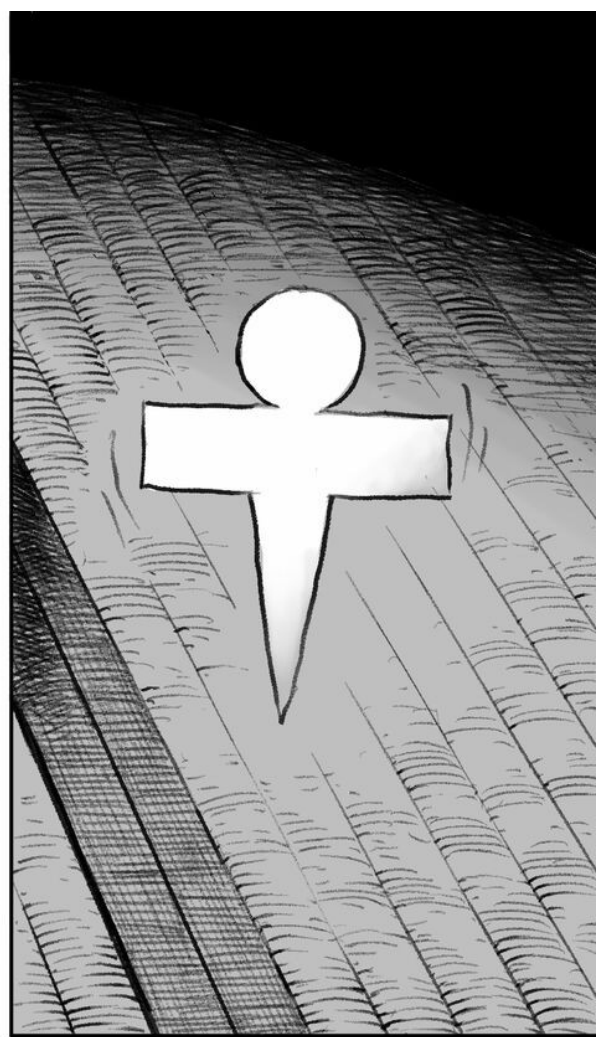
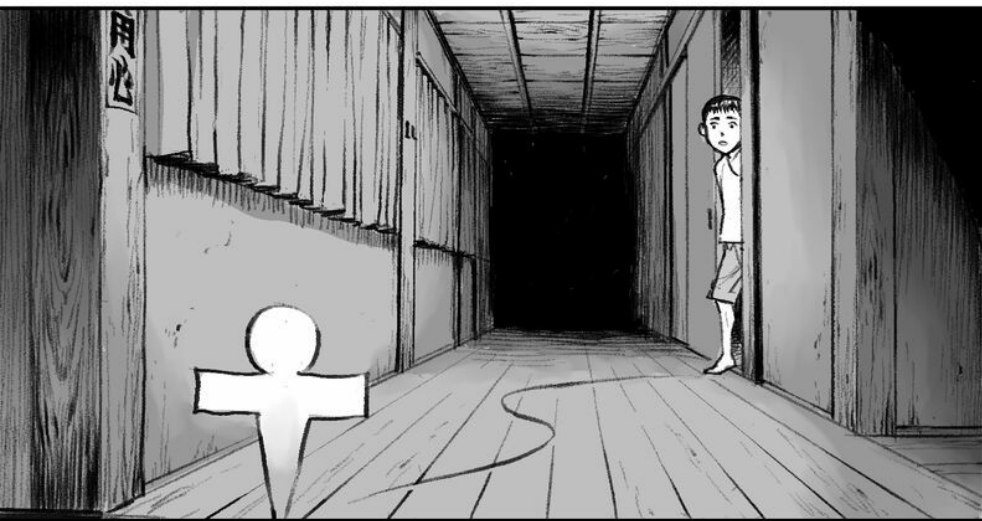
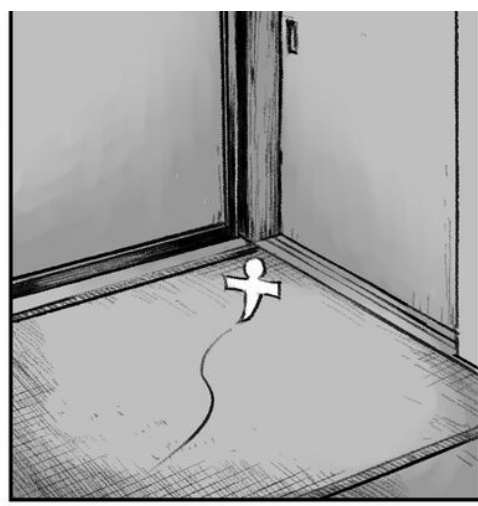


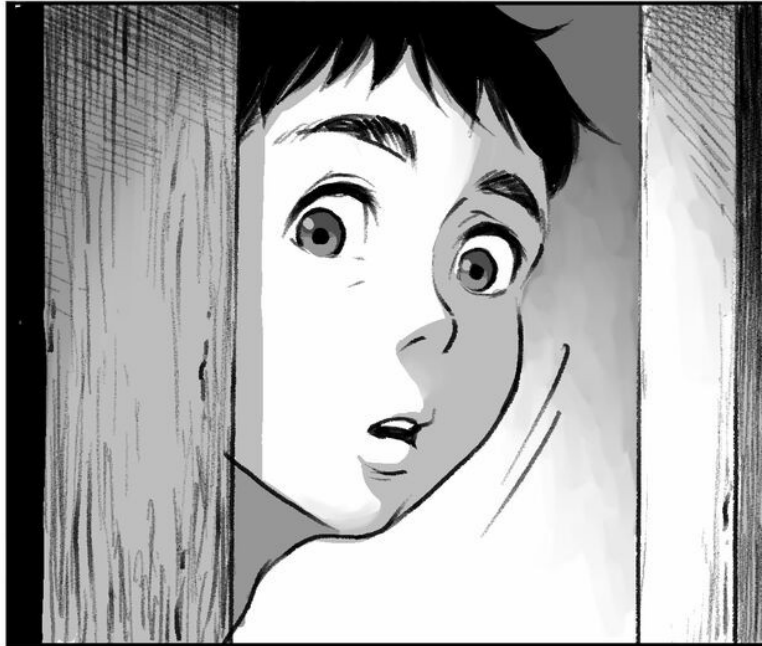
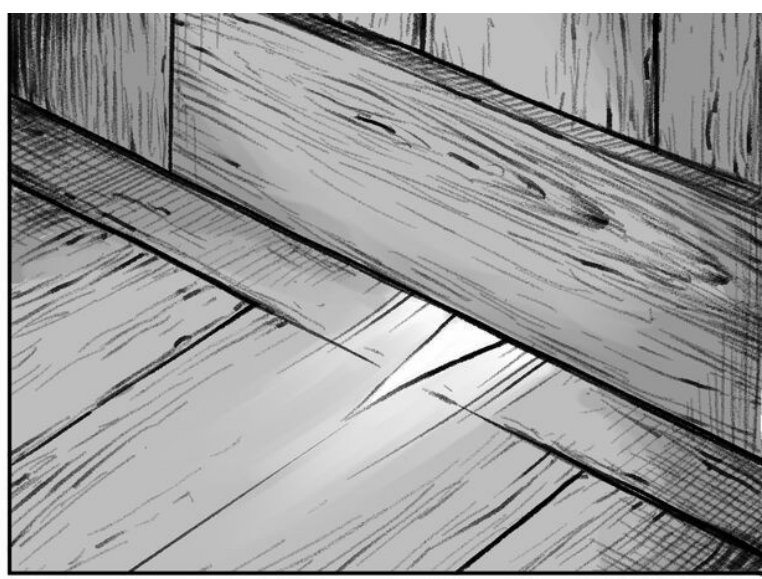






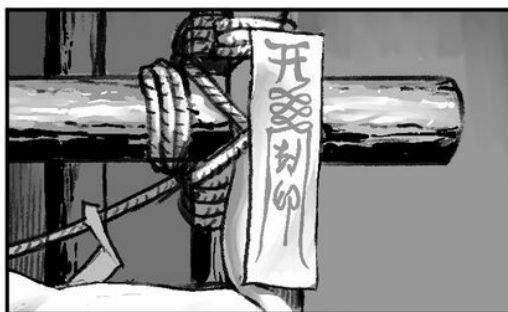


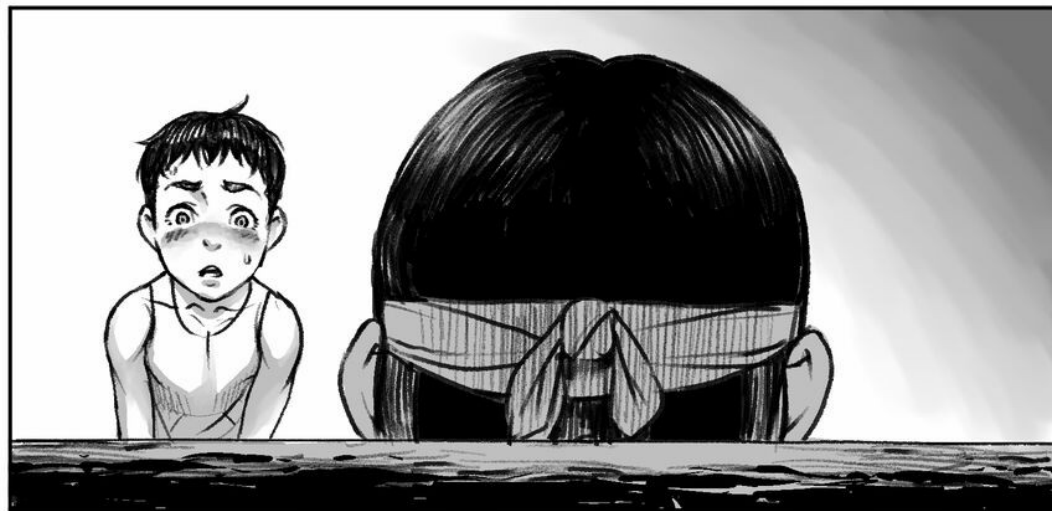
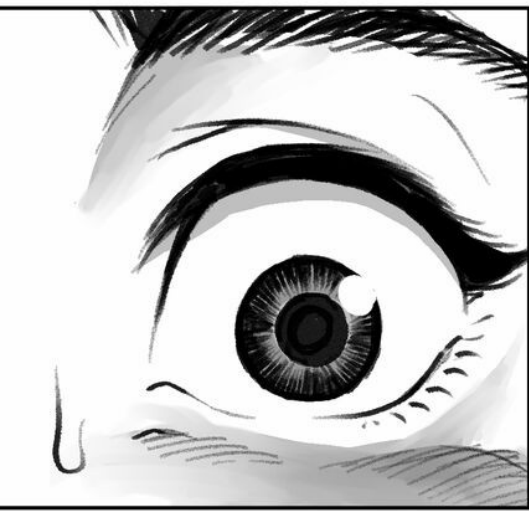
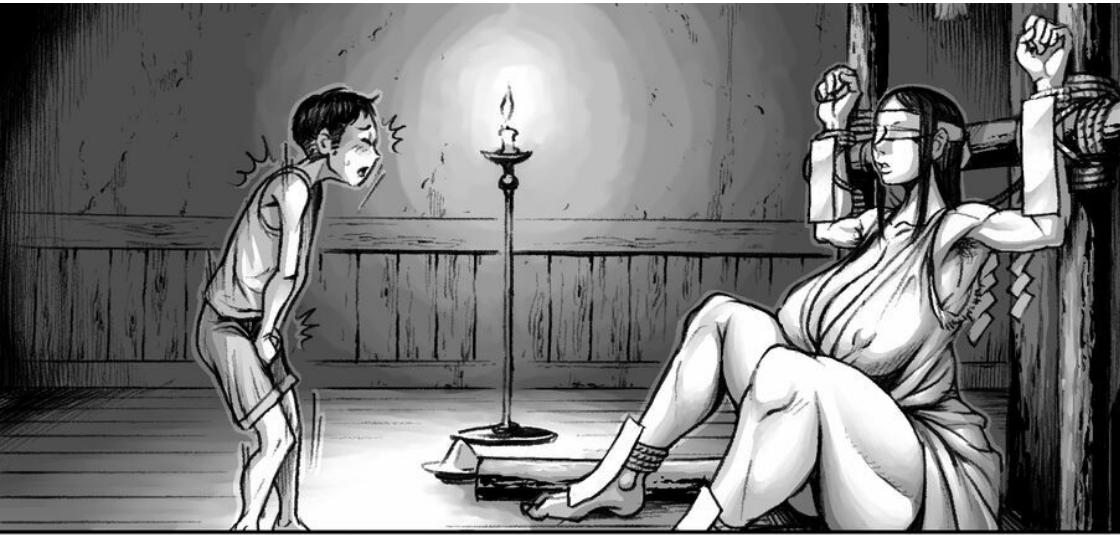


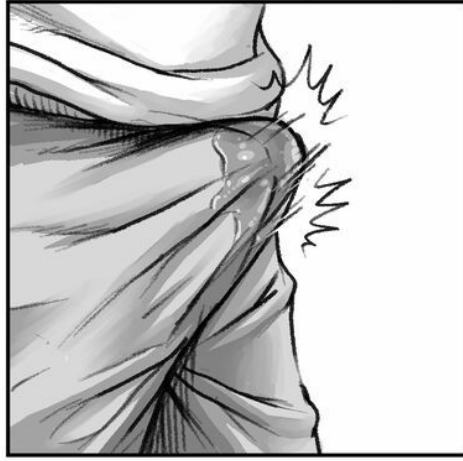


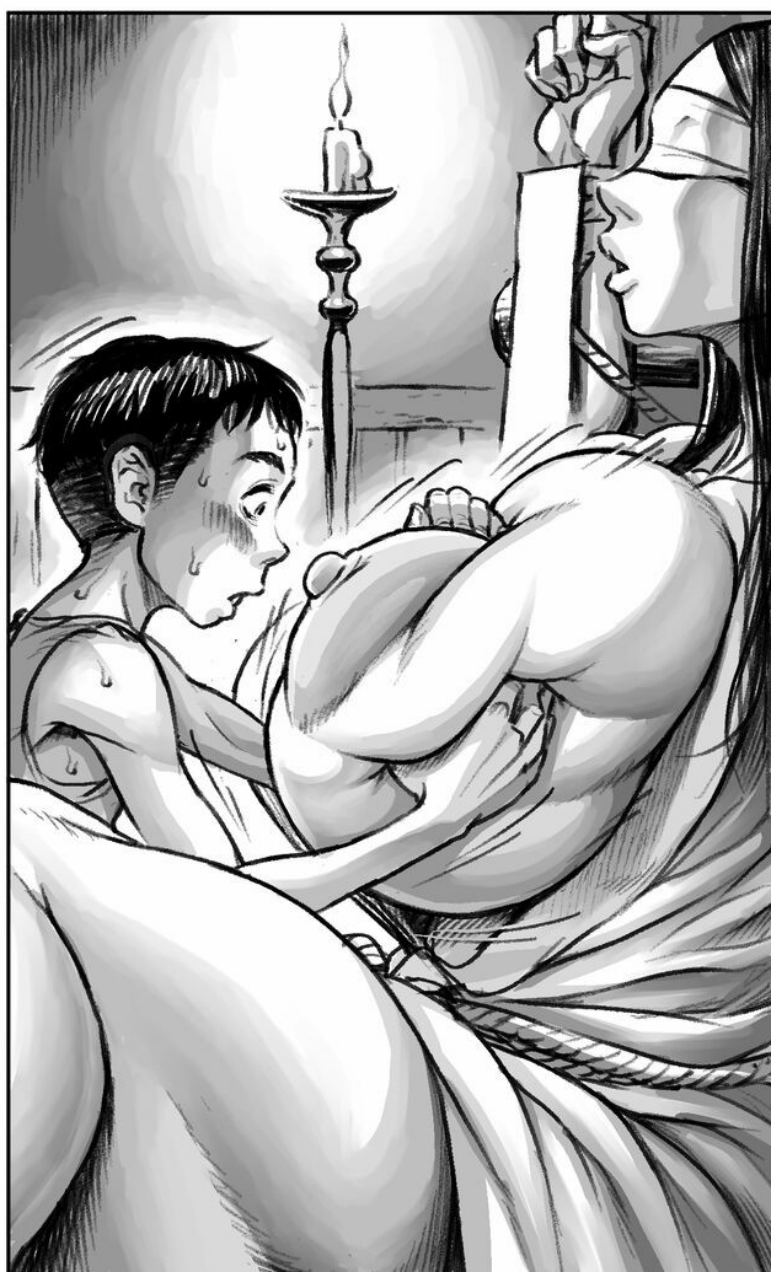
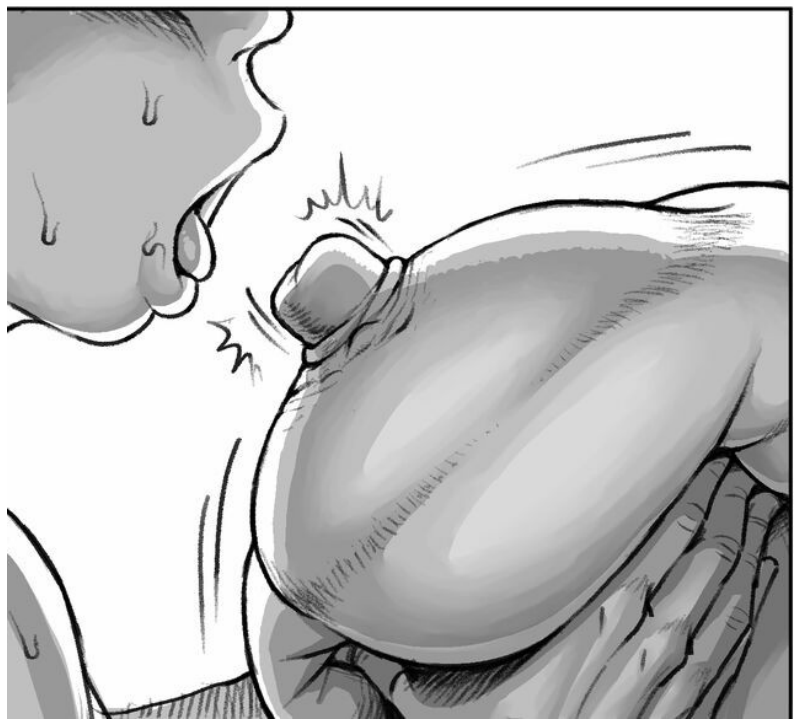
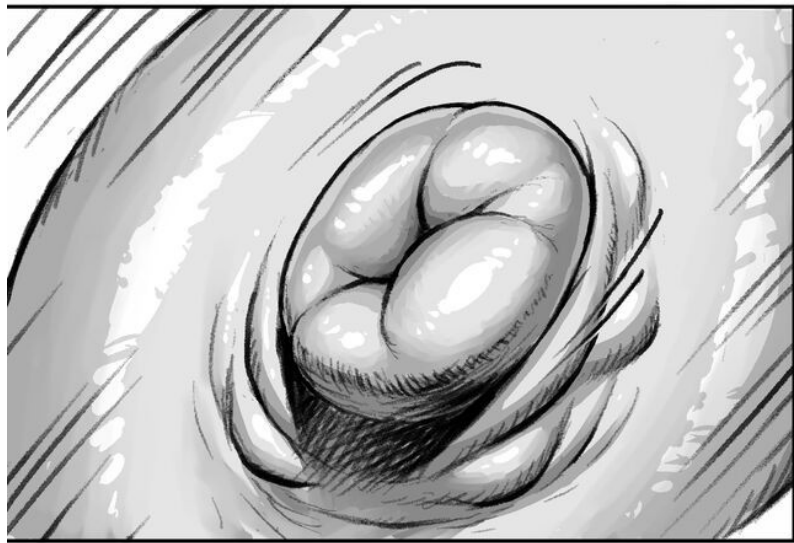
火の用心

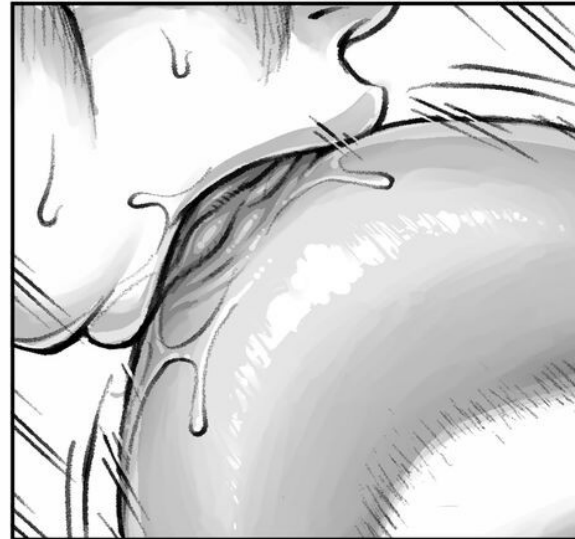


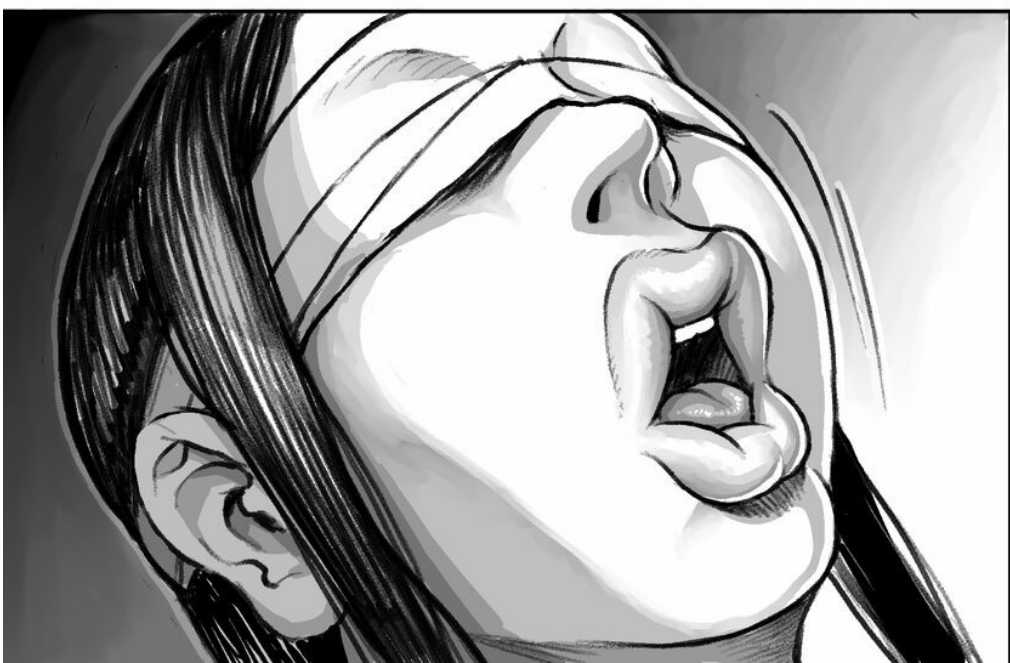
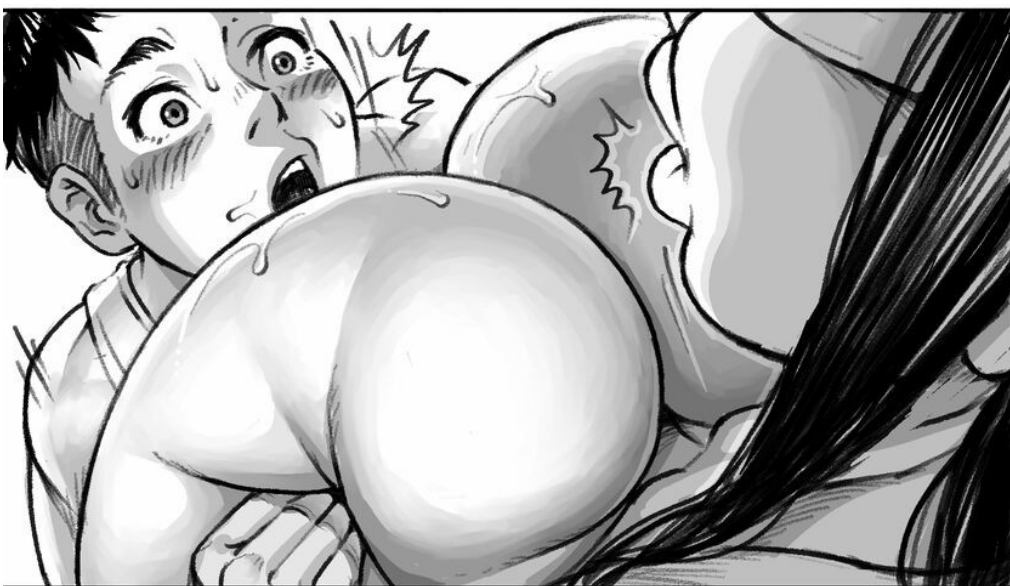






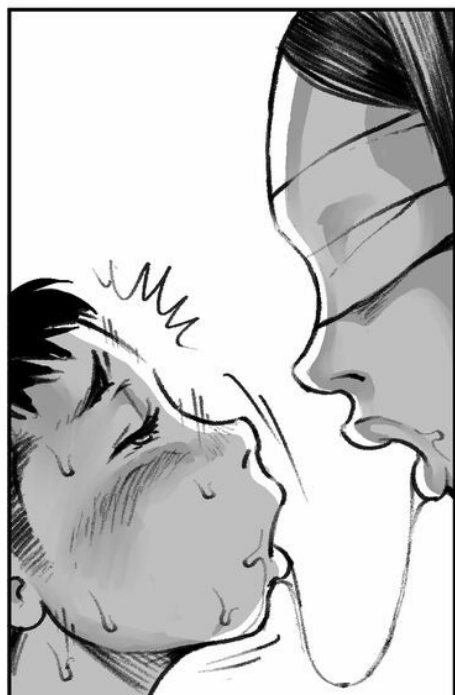


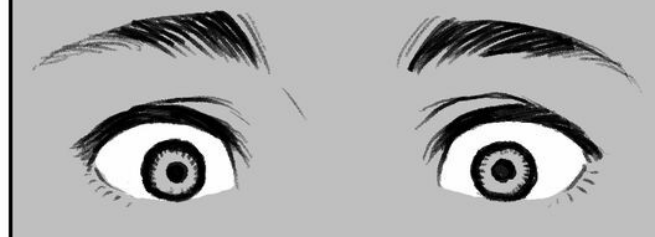
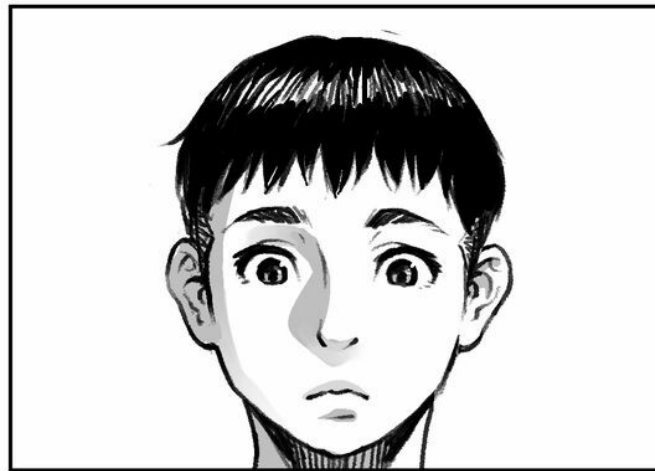
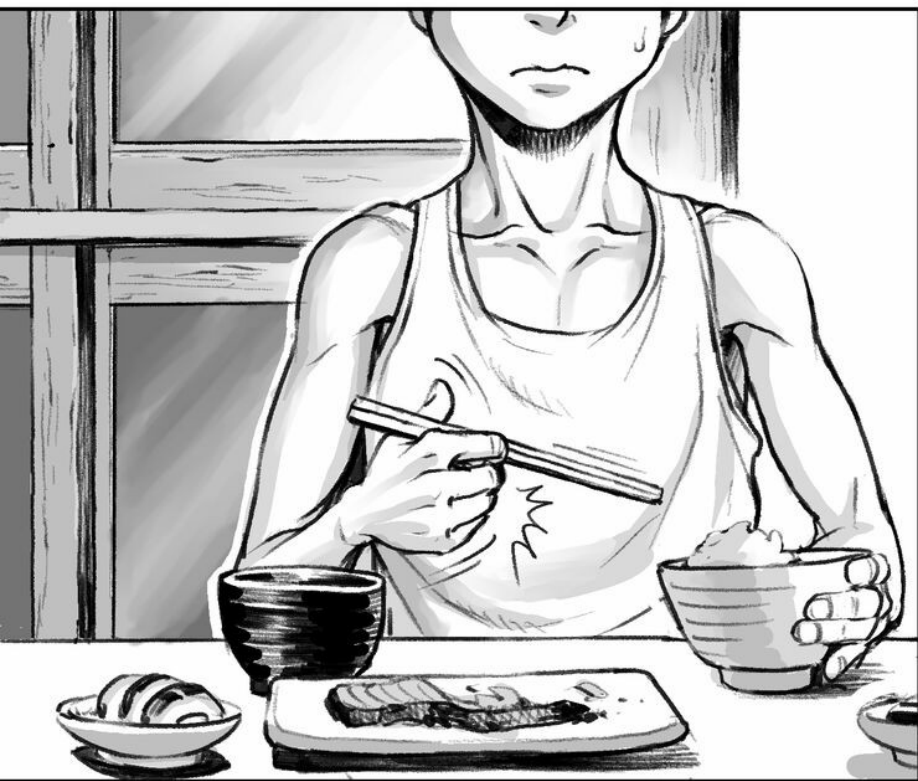


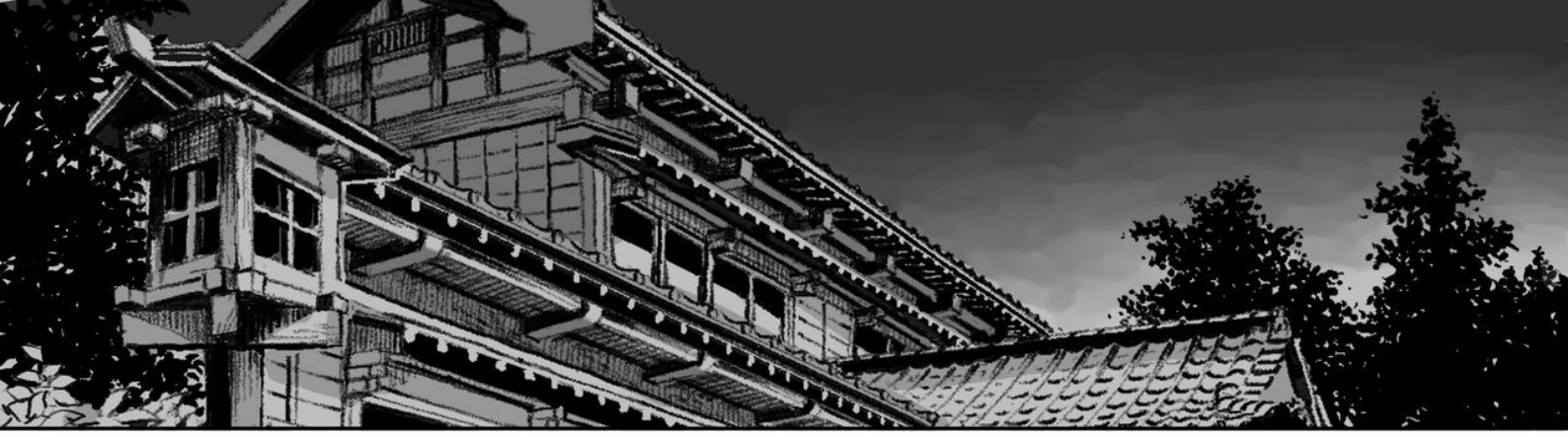


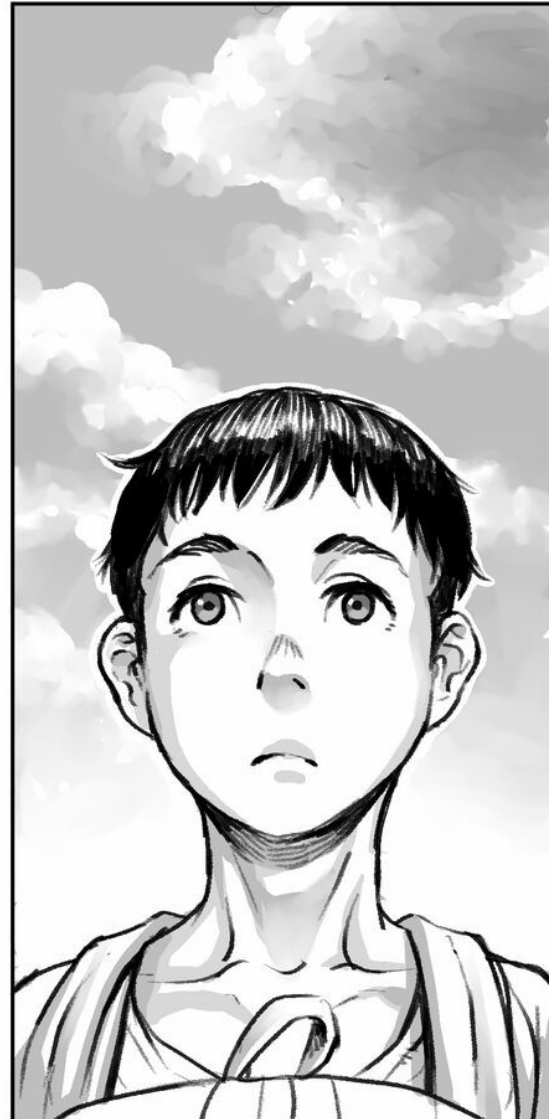
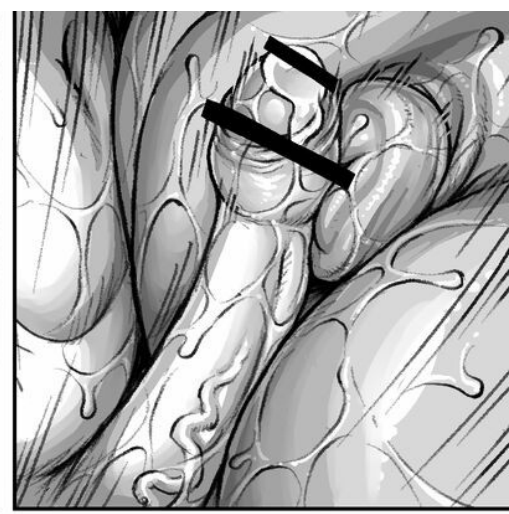
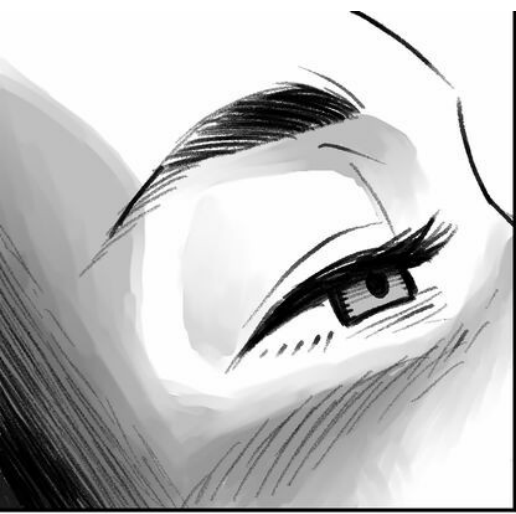


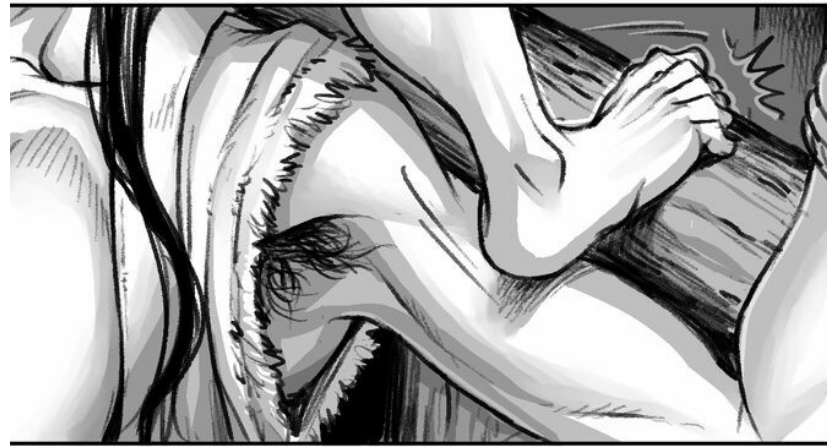
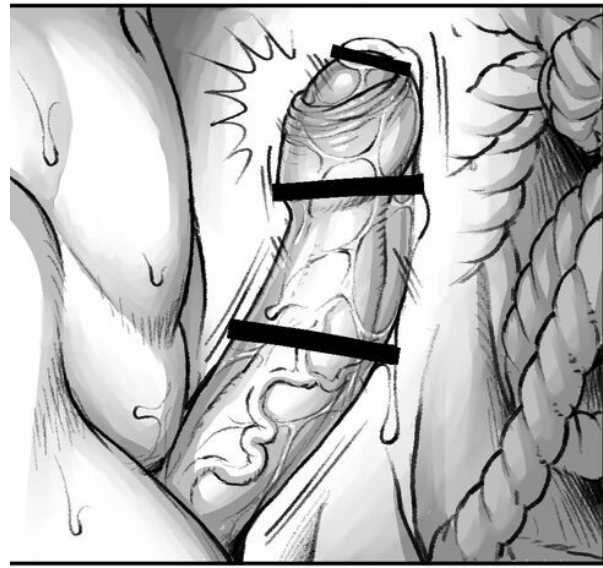
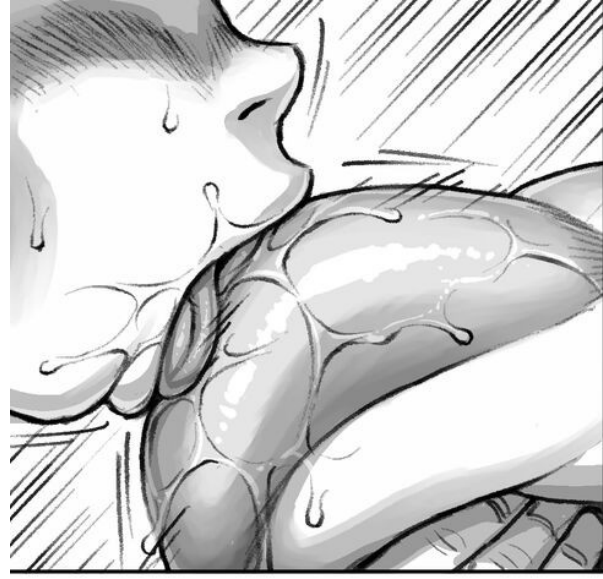


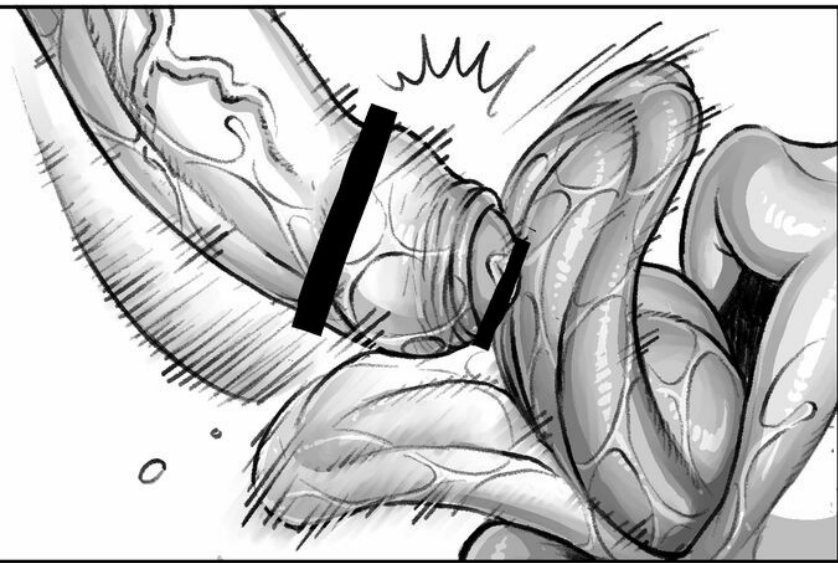




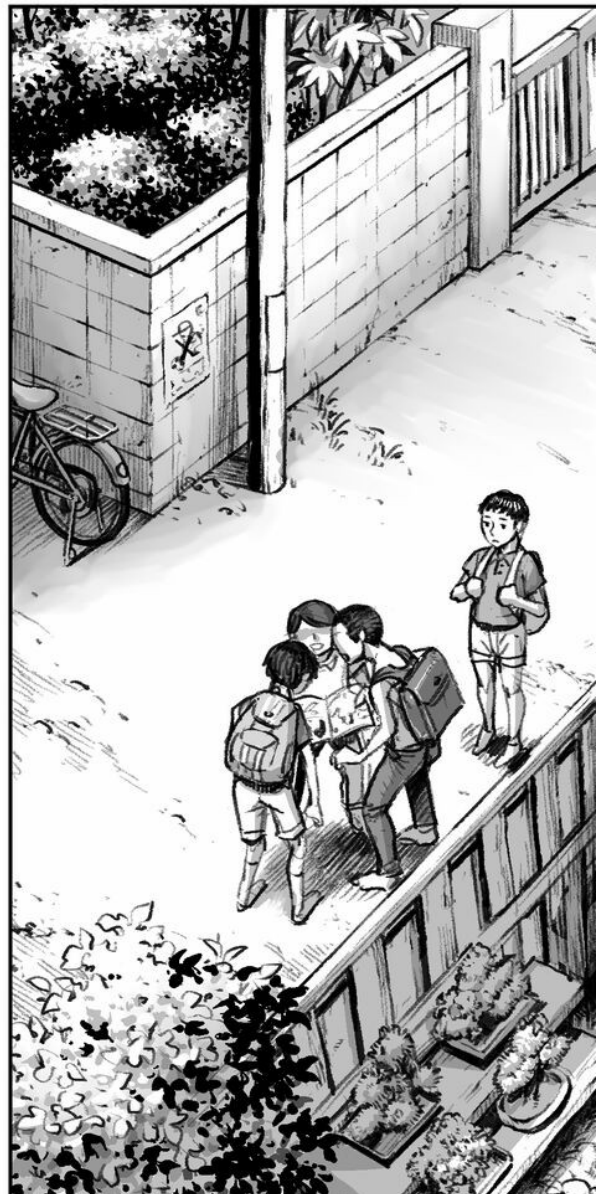
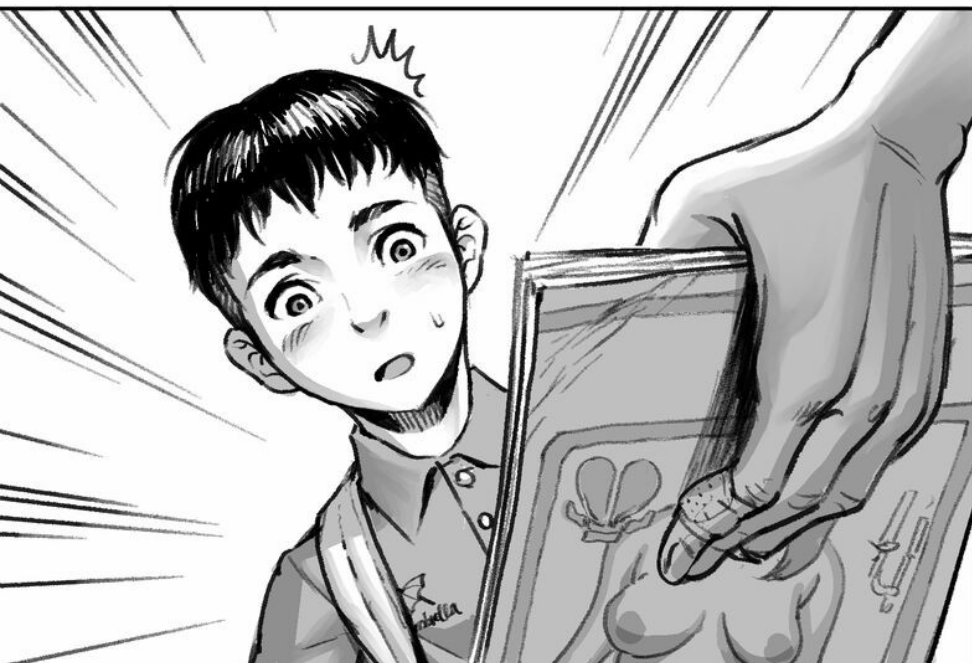


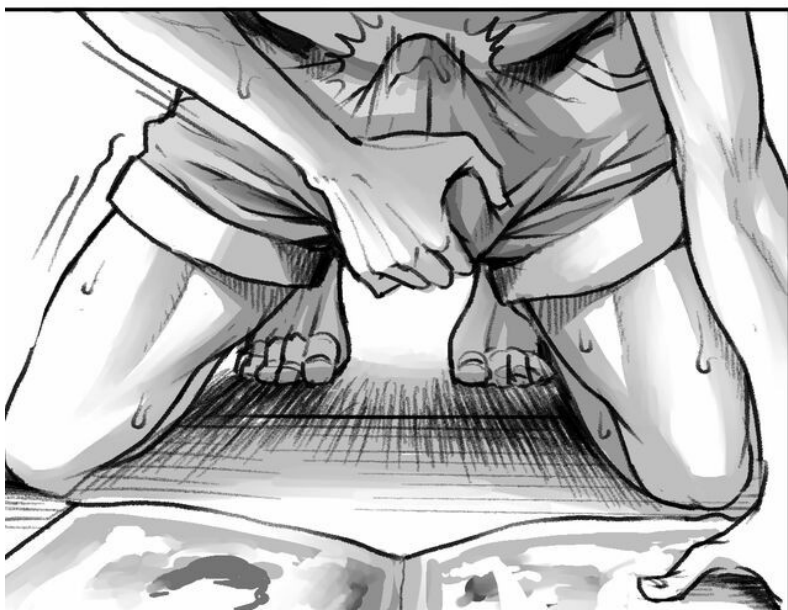
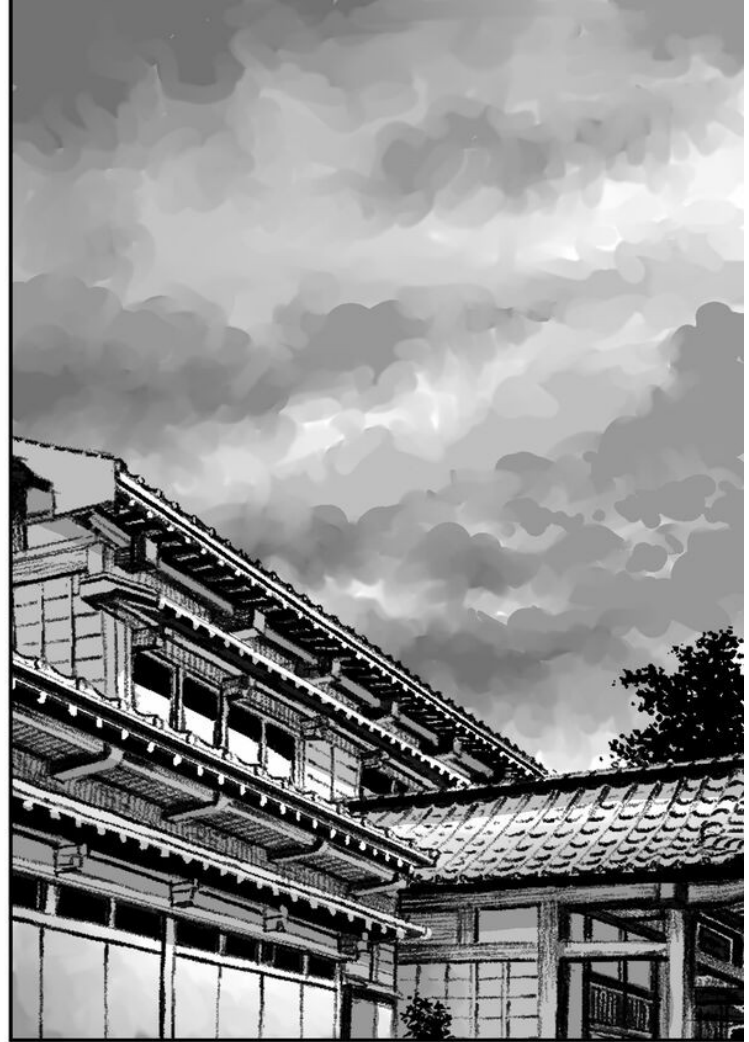




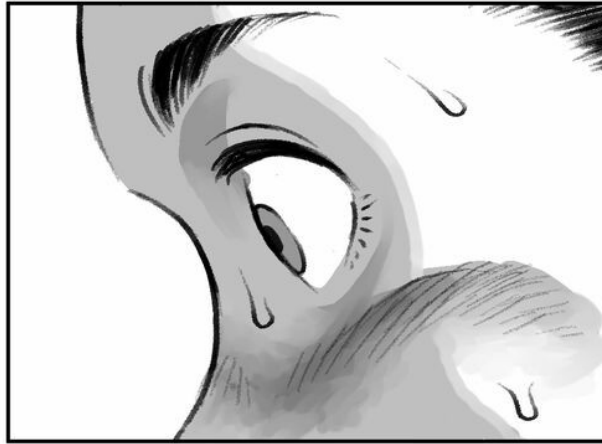
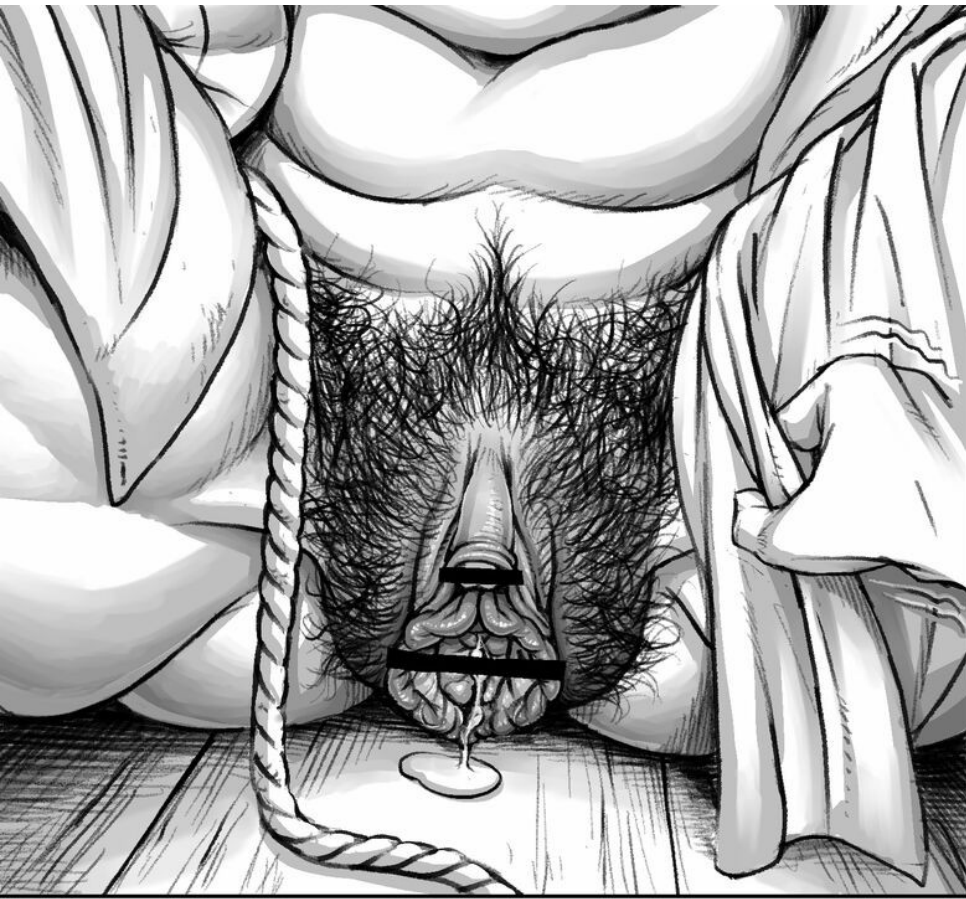


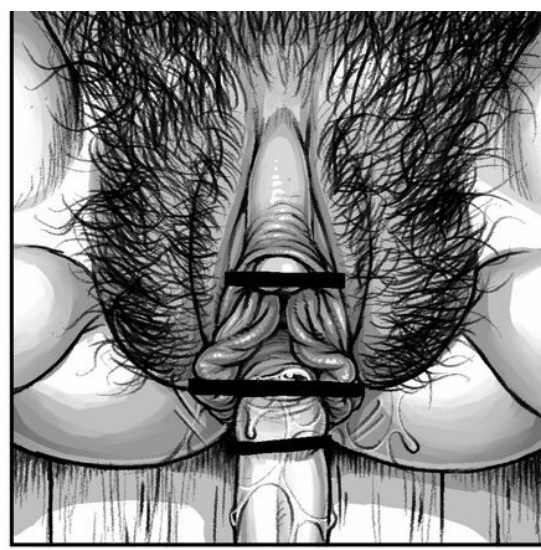










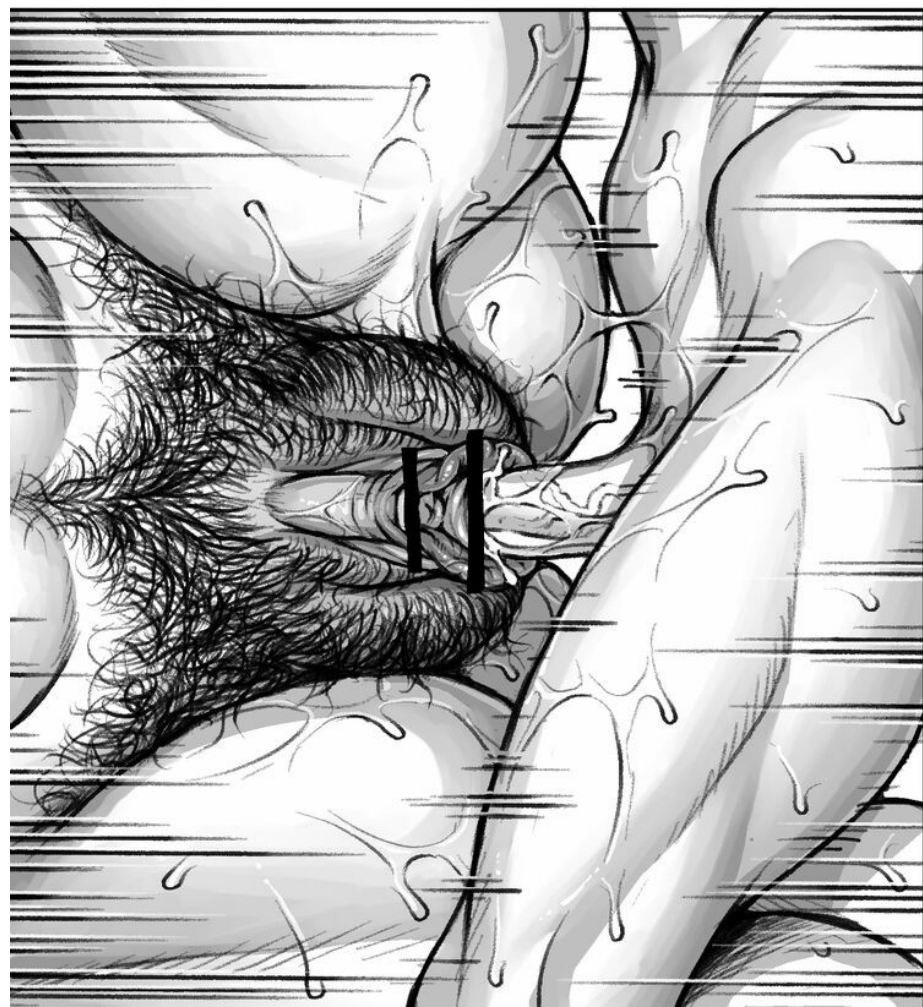
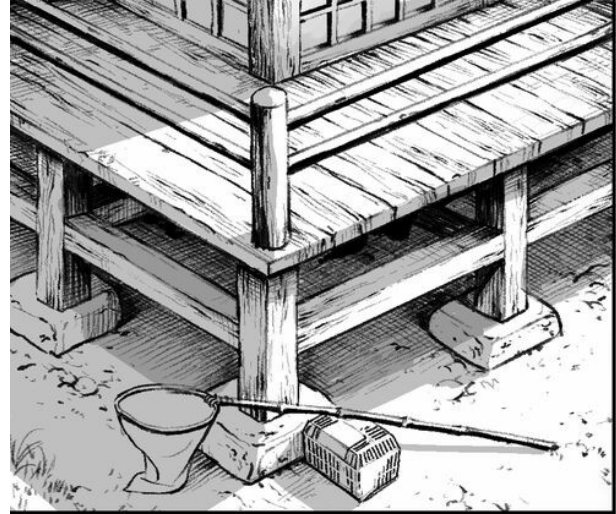








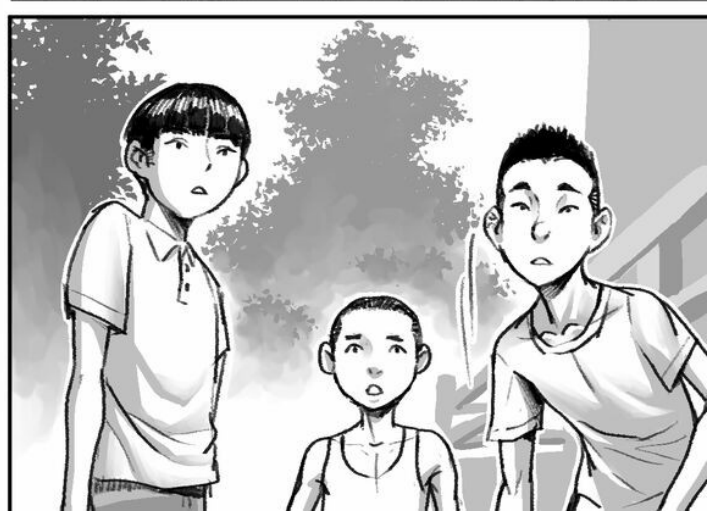
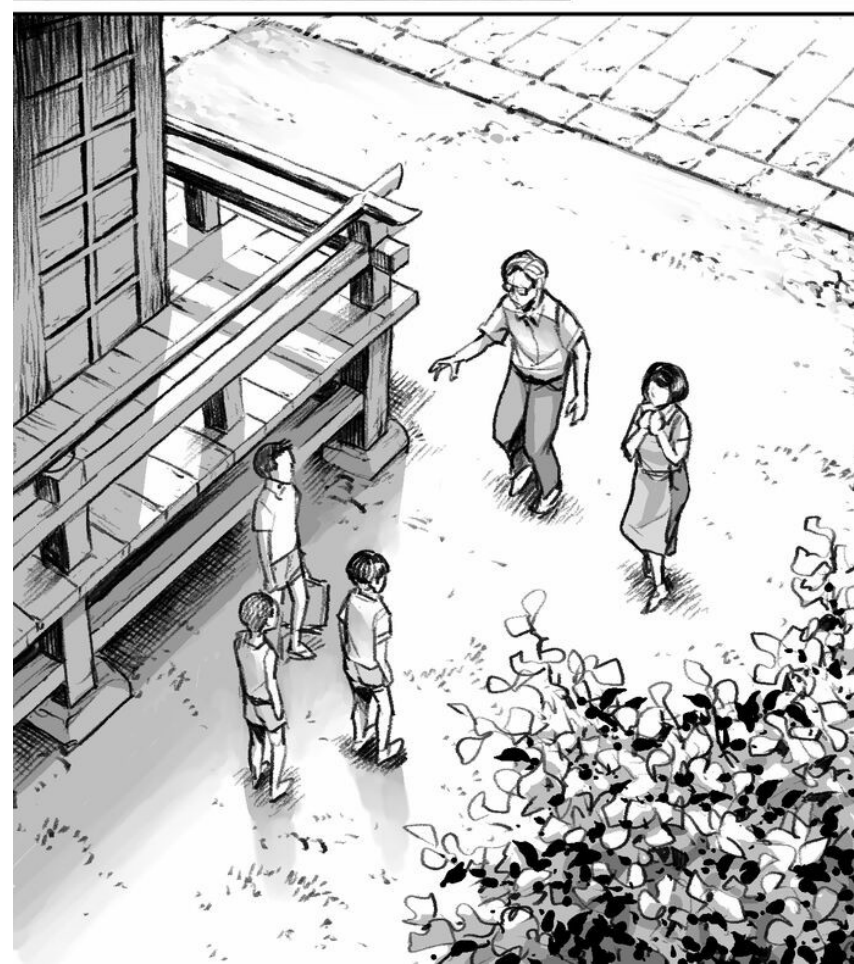


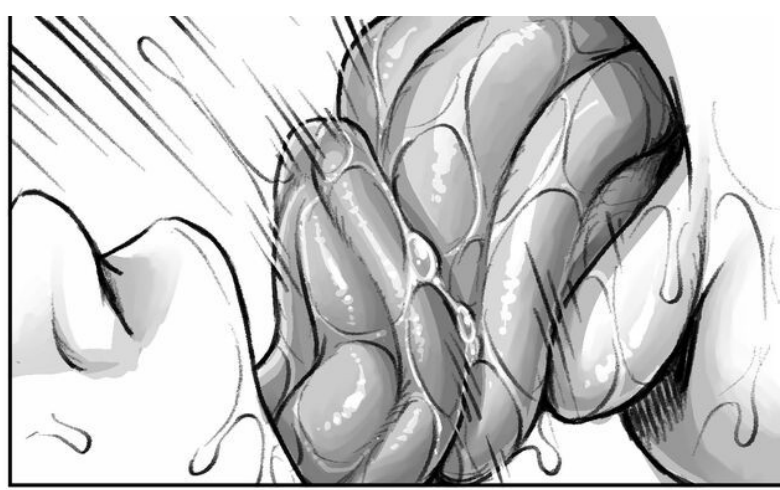


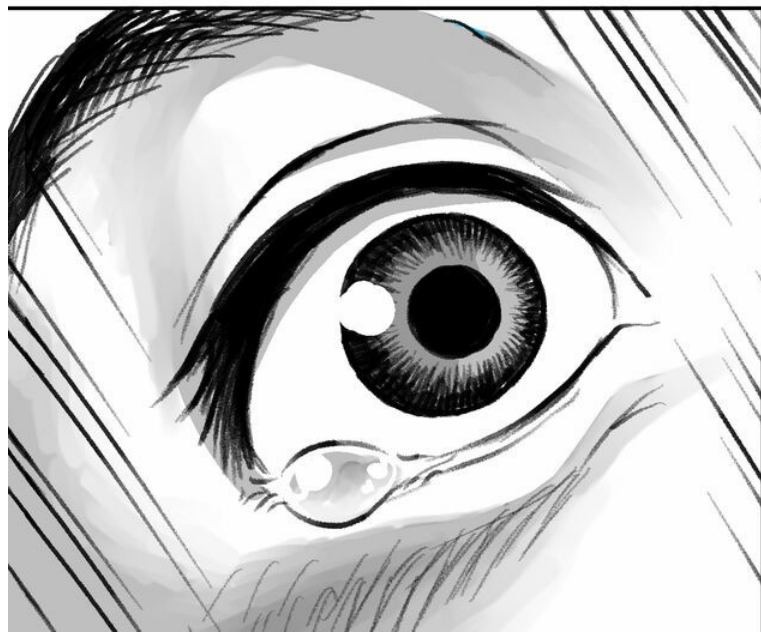


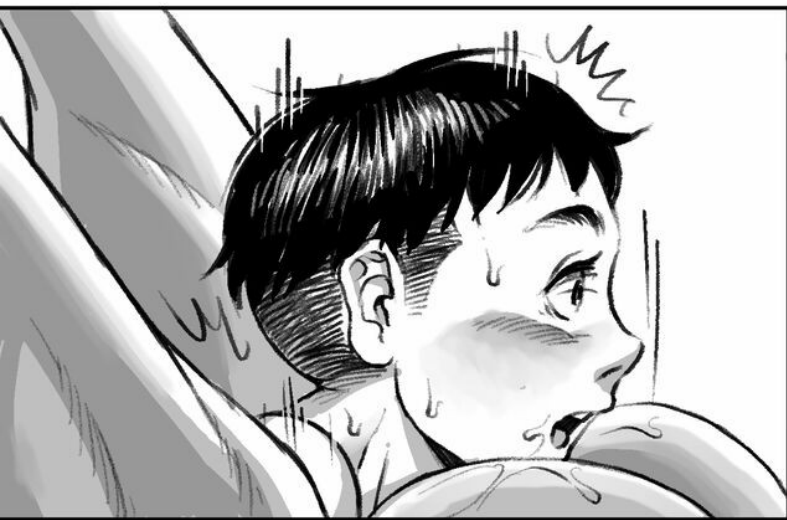


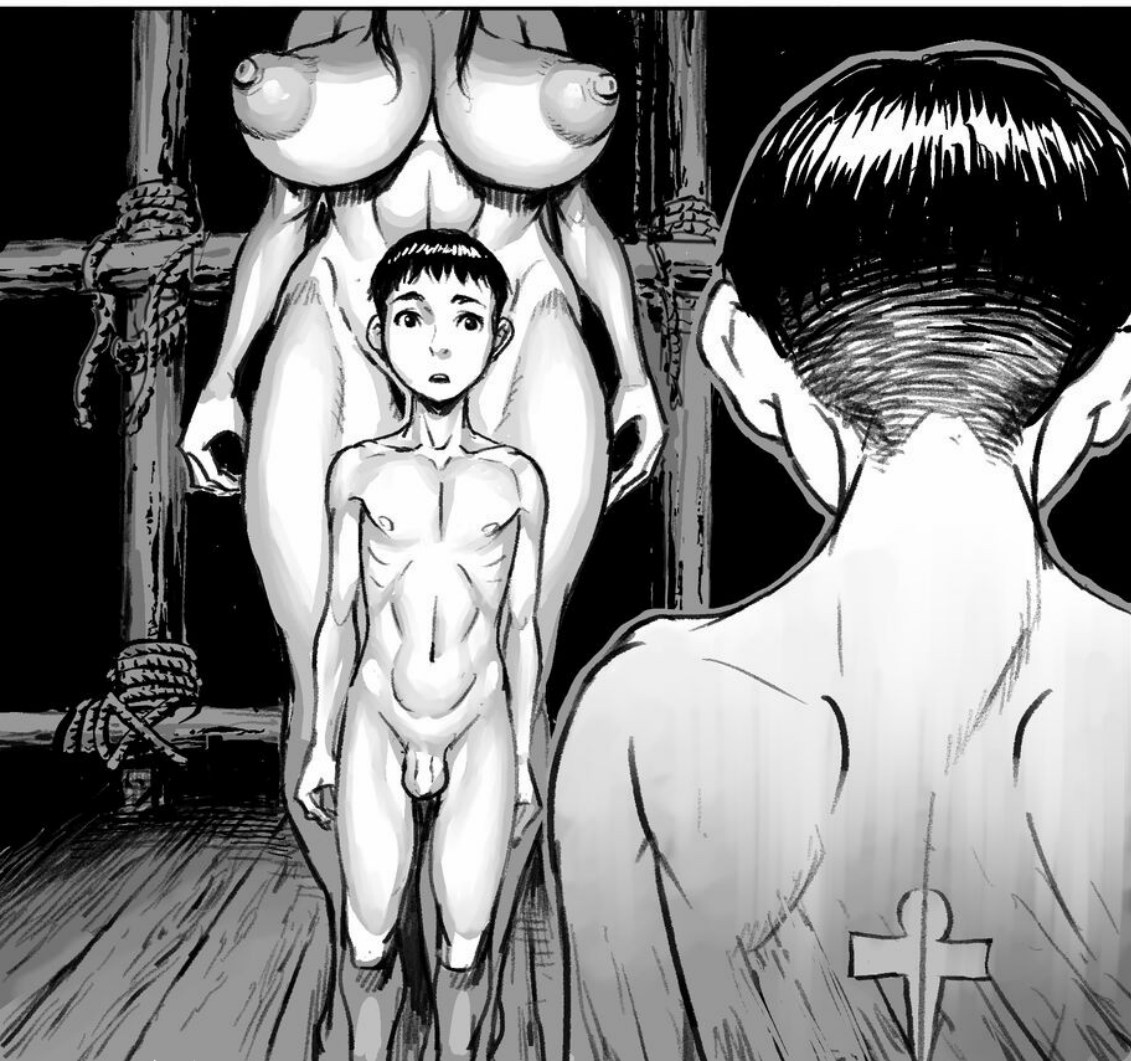
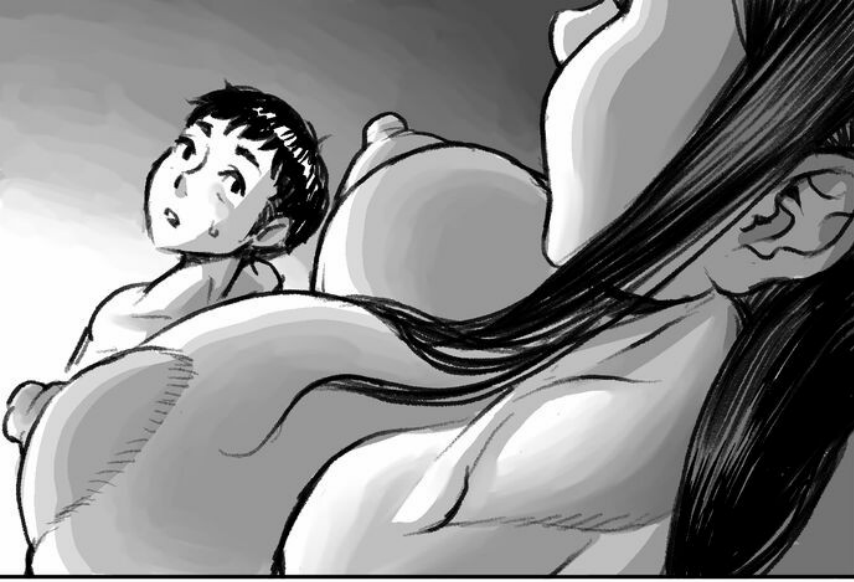


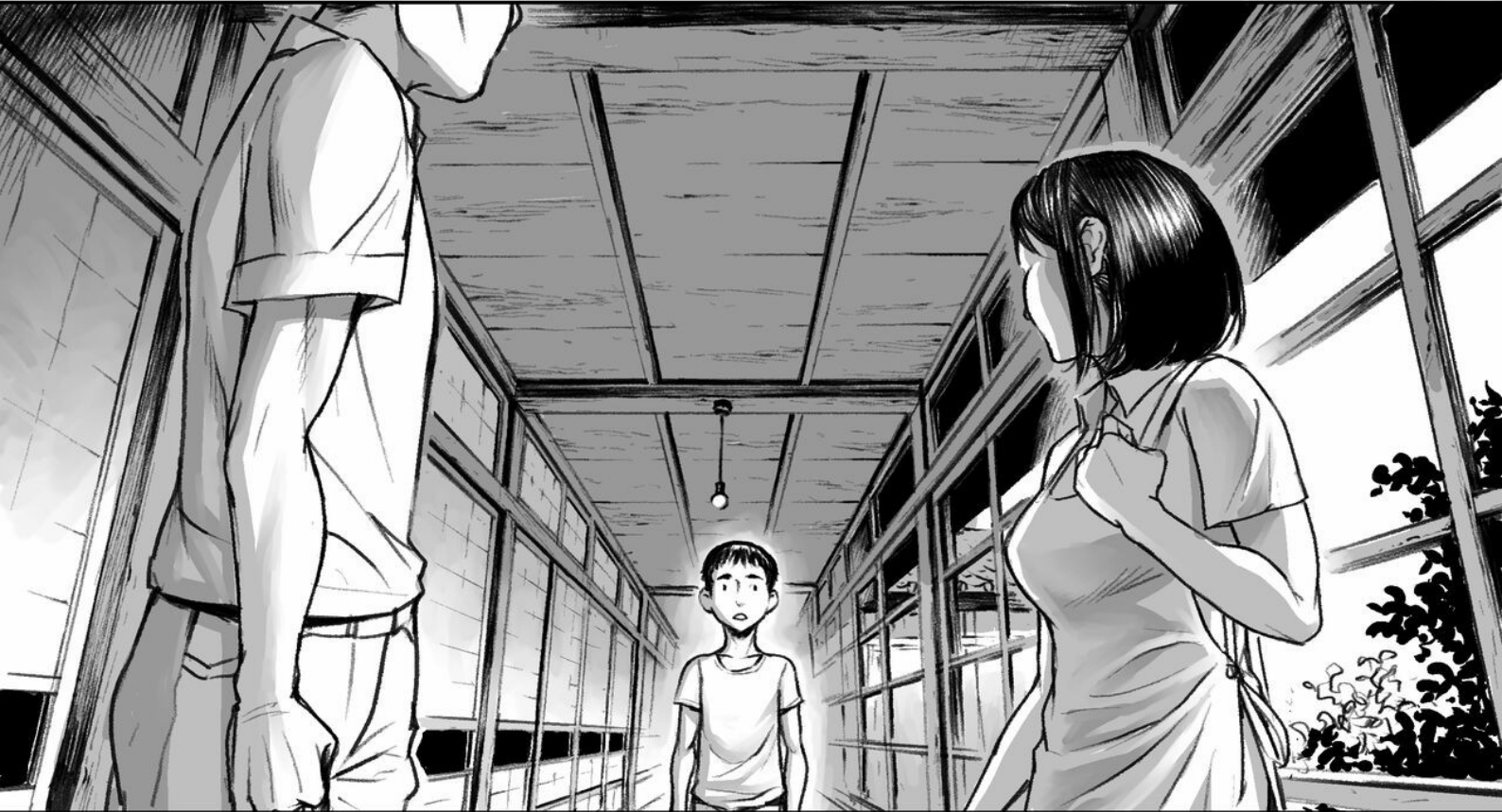


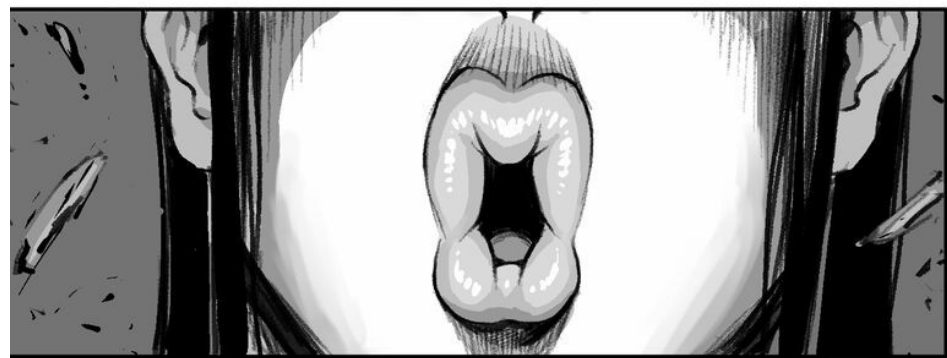
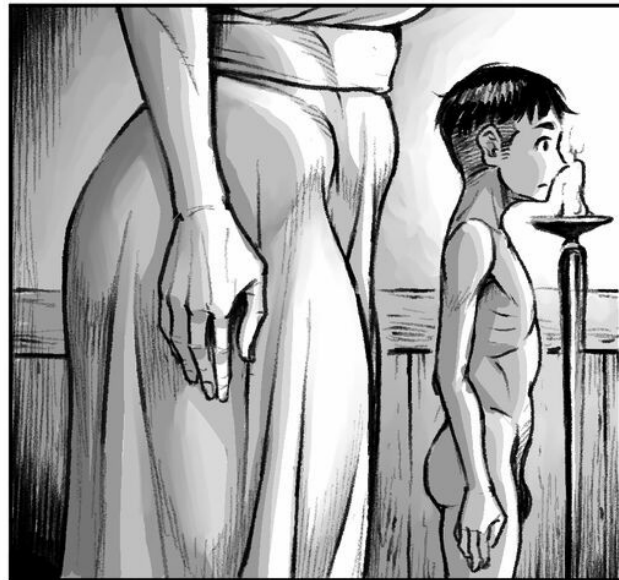












終

- E N D -